

翻刻・玄旨公御連哥

中村, 幸彦

<https://doi.org/10.15017/2332828>

出版情報 : 文學研究. 60, pp.235-307, 1961-03-20. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

刻 立 旨 公 御 連 哥

中 村 幸 彦

解 説

九州大学図書館の細川文庫蔵。大本一冊。全百二十一丁、墨付百十六丁の写本。編者の明記はない。筆写は、僅少部分を書いた一人と、前後を書いた二人計三人で、元祿にやや先んずる頃の筆と推察するが何人かは又未詳。書名は内題なく、表紙左肩の題簽外題によった。玄旨公はいふまでもなく細川幽齋で、その連歌集である。所収は、発句・付句に、幽齋が一座の百韻の完成したものの未完のものをも合せ含む。しかし十分に整備されてはゐない。前半は、発句・四季恋雑に分類された付句、それに百韻類と順序立ってゐるが、後半は得るに従つて追加したものと見えて乱れてゐる。資料によつて和歌を混じたものもある。その数や内容の詳細は、臚刻にゆづることとして、発句や百韻には、殆ど前書がついてゐて、その年次や人的關係が明らかである。そこにこの書の一つの価値があらう。この書の後半を書いた人と同筆で、藤孝事記なる一書が同じく細川文庫に存する。事記は、藤孝即ち幽齋の伝記資料集である。この御連哥も、単なる連歌集でなく、伝記資料と見られてゐたものであらう。幽齋の評伝の一つ藤孝君綿考輯録天正六年の条に、

立そそふ去年にことしの春霞

の一句を上げて「御発句集には立そふきのふをけふの春霞と有之」と注する。この御連哥では、注の方の形で出てゐる。御発句集とはあるいはこの書のことではないか。それでなければ、御発句集などの書を集めて、元祿以前に何人かが編したものであらう。後述するが、この御連哥は、他に余り書写されたものが伝存しないやうである所からすれば、細川文庫のあつた宇土細川家か本家の細川家で編されたと見てよい。とすれば幽齋の和歌集衆妙集を編した、宇土細川家の初代行孝とその周圀が、編者として想像に浮かぶ。これに収まるだけの資料は又、行孝位の人でなければ集め得なかつたのでなからうか。衆妙集（一名細川玄旨歌集）の編纂の片はら、連歌集をも志したものととして、細川行孝かその周圀を一応編者に擬しておく。

この御連哥は、昭和三十三年の俳文学会研究発表会で、小高敏郎氏がこの細川文庫本によつて紹介された（演題「連歌作者としての細川幽齋」）以外は、学界に報告されたことを知らない。ただ福井氏が後掲論文で、幽齋尊老御発句連歌付合なる一冊子のあつたことのみを報告されたのは、同じ内容ではないかと思はれるが

何処に存するか今は明らかでない。

国文学の研究対象にも、研究の集中する作家作品と、さうでないものとがある。細川幽齋などは、甚しくその後者に属する。丹後田辺の籠城中、勅使をもって古今伝授の箱を、智仁親王に伝へた有名な一事からしても、彼の文学史的意義は大きい。この人の日々の文学生活が、そのまま文学史の一こま一こまであった如き存在であるのに、殆ど現今の学界の研究対象外にある。これは放っておいてよいものではなからう。それには、しかし明治になってから出た数種の伝記すら、それらの上に加へること、いくらかもないといふ程詳しい、細川家記とか、藤孝君綿考輯録の如き伝記が既に出来てゐるからかも知れない。がそれらもよく見れば、ゴシップから出来た部分も多く、異説があつて確定しない所も少なくない。まして文学生活の部分となると、アクセサリー的な附録的な位置しか与へられてゐない。大いに今後の研究に待たねばならない。

それでも和歌においては、流石に天下の宗匠であつて、彼の名を逸しては、いかなる和歌史も成立たない。その幽齋は晩年は、連歌にも大いに関心を持ち、歳旦にも、和歌と共に連歌の発句を詠み、連歌の会を自らも催し、他へ出席することもしげい。その様相は、池辺義象の細川幽齋や福井久蔵博士の「細川幽齋の連歌」(和歌連哥俳階の研究所収)にittedだけでも明らかである。しかるに近時隆盛を極める連歌研究界からも幽齋は場外に置かれてゐるやうである。その理由は、伝記とは反対に幽齋の連歌書が、余り世に知られなかつたことであらう。一部の成書もない、連歌の専門でないのに研究がむけられないのは当然であつた。が

福井氏が紹介したまま、人の注意を引かなかつた、漢和の作法書と訓押韻や書名がないが自筆の詳な連歌作法書や、壁草のこれも自筆かと思はれる注釈が、現に熊本細川家の北丘文庫にあつて詳しい紹介が世にされんことを待つてゐる。幽齋の連歌も、これらによつて、彼の文事の欠くべからざる一翼として、研究を見るべきである。この玄旨公御連哥も、さうした意味で鵜刻の価値もあらうかと、この挙に出たのである。

さかしらに人名(初出の処のみ)年次などに若干の注を加へたが、早々の間の仕事で、なほ不明も多く、誤のあらんことを恐れてゐる。鵜刻は、行うつり、丁うつりを無視したこと、仮名と若干の漢字を通行にかへた以外は、原本のままである。

なほ原稿作成にあつては、九州大学文学部研究科の白石悌三・田中道雄二君の援助を得た。(中村幸彦)

正月六日立春

けふにあけて春もまめたつ霞かな

十八日於山崎長松院井尻甚六興行

春雨のこゝろしらるゝ草木かな

二月十七日

いて、みよしかし野守をはなの友

六月廿三日 加藤浄琳興行

すゝしさもつかふ心のいつみかな

天正五(綿考に六年)卯月八日於丹州龜山惟任日向守(明智

光秀)城初興行之一座

龜の尾のみとりも山のしけりかな

天正六々(六) 月三日幡(播) 州高砂近所刀田寺陣取て(綿考に「住僧発句所望ありければ」と)

夏の夜も霜はおきけりかねのこゑ

六月廿二日(綿考に天正六年) 幡州在陣水監(綿考に「水野将監守尚」) 興行

おきにさへこぬ秋かせのあふき哉

幡州書写山にまかりけるに堂前の桜のもみち所々に残りけるをみて(天正六年か)

花もかくや散し桜のうす紅葉

天正六正月朔日於江州安土越年元日試筆

たちそふきのふを去年の春かすみ(綿考に「立そそふ去年にことしの春霞」とあり)

正月二日於宮内法印(山岡道阿弥景友か) 新宅之會

繪にかくやはなもときはの宿の春

於物業女(山城) 宗恩寺後鳥羽院御忌月二月廿二日

山鳥のしたり尾見する春日かな

山崎より月次之連哥とて所望に

朝川にさよ風うかふ木の葉かな

山崎井尻左衛門尉年頭之會初とて所望にわかなを

たのしきをつむや千とせの初わかな

千句第八

やま松のかせのこゑをるみ雪かな

天六二日=立春の心を

あすとおもふ春やけふさへあさかゝみ

正月廿三日久保久右衛門所望

竹の葉にむめかゝそよく軒端かな

二月廿五日山崎谷の寺にての月次の連哥とて所望

谷水のあひよりいてし柳かな

久保久右衛門新宅作て其年の會はしめとて所望

春をへてあくまでやみんな家さくら

善勝(一条地藏堂の僧か) 久(「ひさしく」と訓む) 当国

有て帰参之時所望

おとつれとおもへみやこのきた時雨

試筆

去年たちし春もけふこそあさ霞

杵築(出雲) 本願より発句所望なれば(天正十五年の九州道

之記中三月二十八日)

うのはなや神のいかきのゆふかつら

かやうにいひやりける=千(千家神主家)かたよりいまの発

句は北嶋にて連哥たるへし我かかたにても一日張行すへしと

て舟に乗所ニおひ付て発句所望也いそかはしきにはいかゝと

度々申せしかとも所のならひにやわりなく申されける程ニ人

の心をやふらとし(道之記「しと」)て思ひめくらすに折ふ

しほとゝきすの名乗ければ(同三月二十八日)

ほとゝきすこゑのゆくゑやうらの波

慈恩寺所望庭前=楓の有をみて(同)

深山木の中になつをやわかゝえて

五月三日湯津寶塔院ニやとりけるニ発句所望にて其夜百韻を

つらね侍り(同)

浪の露にさゝ嶋しける磯邊かな

五日舟出せしニ跡にても一折張行すへきよし有て所なれば當座ニ(同)

うき草のねにひかれゆくあやめかな

豊前柳浦の名主とて発句所望ニ(同)

豊國の山くちしるきさなへかな

六月六日姪濱興徳寺住持(道之記に「耳峰玄熊和尚」)和漢興行有へきよし有て発句所望有しに公儀これまで云成と有し程に張行は成かたしとて発句を書遣して入韻所望せしに(同)

かせかほる南を松の戸ほそかな

とをしまにたちくはゝるや雲の嶺(同宗義智の乞による)

廿五日可張行とて溝江(溝江大炊允長成)所望ニ(同)

浪のおとも秋かせちかし西の海

七月四日関白殿(豊臣秀吉)関渡より御帰陣也舟にて参陣せし程に馬などもなしさらは船にて南の海をめくりて上らんと定侍ニ秋風日ことにあらく成て出舟ならて六日までととうりうし侍りて思ひつゝけゝる(同)

秋とぶく風やせきのととまり舟

本国寺の住持一會興行すへしとてしきりにとめられ侍ればちからなくして其日はとうりうして九日(同)

もる月もいましほの木のまかな

天神国府圓樂坊発句所望なれば(同七月十日)

色わけよ忝こそ風の手向草

大聖院僧正良政発句所望有て十三日一會有當社ニかゝみの池と云あれは(同七月)

影うつす月やかゝみの池の水

十四日にも棚守連哥興行すへきよしあれとも玉まつる日にあたれり心つきなきやうにや有へきとしたしひけるニさらは発句斗をと所望也思ひかけぬ時鳥のなきければ(同七月)あきやまたはやましけやまほとくす

竹田法印亭など有てすゝしきよしあれはたち寄てたかむるニ

終日有て暮かたきに舟をいたすへきよしをいへは発句所望也

(同七月十八日朝にて)

名残ある月やともつなみなと船

発句十四日立春有心を

としこえて又またれけり花の春

菊亭右府(今出川晴季)院御所御月次之発句御名代可任之由

被仰下付

若みとり松に相追の柳かな

於一如院(綿考に「十如院永雄和尚は(中略)建仁寺ニ而は

十如院と申丹後ニ而は一如院と申也」と)

灯のはなにもかほれ窓の梅

智光院興行

根やひとつなみのみたれ藻川柳

卯月廿四日興行

さ月まつ花のかしめる雨夜かな

七月十七日興行

おきのことゑやうこかす露の玉すたれ

霜月十三日宗巴(秦宗巴)祖父百ヶ日之追善興行

淡雪をこの木のものとしつくかな

於筑州宰府思河見物して（天正十五年九州道之記中五月二十六日）

くるゝ夜のほたるやしるへ思ひ川

六月廿五日於筑州箱崎溝江興行（再出）

浪のおとも秋かせちかし西のうみ

對馬（宗義智）より発句所望九月廿日

紅葉々の雨やそむらしあさち山

九月廿二日於臨江寺高野木食上人（應其）興行発句所望

秋のいろをみ山木いつれ菊の庭

上総國昭莫の齋（道記に「昨夢齋」とあり）陣中納（切か）

々被來付興行六月廿二日（天正十八年東国陣道記中）

待によらは千くさのはまや秋の浪

甲府樵雲（道記「雲齋」とあり）宗壽興行七月十八日（同）

雲霧に月の山こす風もかな

同廿日

末の露もやかて草根のしつくかな

七月廿日於信州木曾萬松寺興行（天正十八年東国陣道記中）

月のみか寢覺のとこのあきのかせ

薩州鹿兒嶋に越年の元日試筆

たひころもはるをうらやむことしかな

於市來雨にはかにふりければ旅亭にとゞまりて俄一折興行有

しニ（文祿二年）

雨もよに花やとめてんやとの菴

二月三日柳川にとゞまりて陣のきたうとて千句有へきよし有

て発句所望なれば（同）

霞にや入江の月の御舟山

肥前かせと云所にとゞまりしニ去年の秋薩州下向の時參會せ

しに又旅亭たつねられて跡にて一會興行すへきよし有て発句

所望なれば（同）

去年こしはきのふそ空もかへる鷹

於名護屋天満宮万句木山紹宅被執行」由有て発句所望

晝は世に又のそみなきいろ香かな

四月廿四日溝大（溝江大炊亮長成）月次執行とて興行

蚊のこゑもすくも火けふるいそやかな

釣楽廿五年追善の連哥とて大物発句所望四月廿七日

うつせみのよもいまさらのなく音哉

五月五日

ぬれてかれともにみるめのうらの波

出羽秋田 對して興行會とて東紀州（東條紀伊守行長）所望

袖のうら彼国なれば

たちかへるなみ風すゝしそてのうら

於平戸法性寺六月廿二日

蓮葉のたねはこゝろの根さし哉

長門国府神主の家にやとりけるに発句所望

浪の花も秋なきうらの草木かな

発句所望斟酌してたちて四日市と云所までつきて有けるに頻

所望とて被越使者けるまゝ無了簡當座

心をやかはしまの水秋の菊

十月廿六日於紹巴（里村紹巴）興行

水ならて木葉なかるゝ岩間哉

天正廿元日

としといひて春をむかへし今年哉

所勞祈禱の連哥の発句とて疋田右近所望^二

むめかゝに霞はれゆく月夜哉

正月廿二日入唐餞別とて昌叱(里村昌叱)興行

入をみはいつるやまたん春の月

一之齋(沼田統兼)親父宗禪(光兼)卅年ニ成侍れば懐旧之

連哥すへきよし有て所望有松倉より書てをくり侍(綿考に文

祿元年四月)一

うたゝねのいさめやむかし郭公

一平田の宿の亭主子所望ニ(文祿元年の西園下りの時)

おく露に月さへしけるあしへかな

御崎明神見物にまかりけるに神主むかひに出られて對面しけ

るニ神前ニいさゝか田の有けるを是三國の初の田地なりと物

語有てのち発句所望ニ(同)

いまも又を田のはしめの早苗かな

銀山慈恩寺所望ニ(同)

花やさく岩かきつはた谷の水

湯津寶塔院興行卯月廿一日(同)

草まくらむすふやちきりほとゝきす

濱田安岡右衛門所望ニ(同)

石見かたしけるはなみの玉藻かな

於由己(大村由己)興行五月廿五

五月雨のやま風すゝし入日かけ

山中橋内所望ニ六月(文祿元年か)

蟬のこゑやそめぬしぐれの奈浦山

八月朔日於珠長(同)

おきこゑ波とかせとやいその奈

九月四日義久(島津義久)御興行ニ(文祿元年)

ちよやへんまつにあひをひのきくの庭

九月廿七日(同)

わかてみんなもみちやはるのさくら嶋

十月十四日於拙齋(新納忠元)興行(同)

木からしも月におしまぬは山かな

大隅宮内八幡領勘落之刻社家桑幡左兵衛発句所望當座ニ(同)

山風をなげきのもりのおちはかな

庄内郡城逗留之中連哥興行有へきよししきりに一雲(北郷時

久)申されけれども時分から由断之様ニきこえも有へきと辞

退しければさらは発句被申遣れば(同)

神無月さなからはるのみやこかな

十一月十三日於抱節(伊集院抱節)興行(同)

冬木まておかんやなきの條もかな

鹿兒嶋のもみち霜月中旬までさかりにて遠山所々雪のみえけ

るニ(同)

ちらてまつ木すゑに雪やおそ紅葉

於藏人亭御興行霜月廿五日(同)

嶺のゆきうつつすこゝろのかゝみかな

天十五
六月八日利休居士所へ関白殿渡御有てしはし御物語有てのち

一折と被相催候発句つかうまつるへきよしあれは箱崎八幡の

心を(九州道之記中六月八日)

神代にもこえつゝすゝし松の風

廿七日関白殿花瓶あまたとりいたされて草花をいけられたる
御座敷にて俄一折」と被相催て発句つかうまつるへきよしあ
れは(同六月二十七日)

夏草にはなのかならすたもとかな

春発句

春風をなひきてさそふ柳かな

下草の露をこすゑの柳かな

河風に玉藻かたよるやなき哉

河風の蠢かゝなかつすみ谷かな

鶯も野はなけれはや宿の梅

雪をまつ若なにかへす田面かな

柳をもおるへきかりのなく音かな

ちるはなにことゝふかせのやとりかな

はなさけはみやま木ならぬ木ともなし

雪白し外のかすみに北の嶺

またれこし程は物かは花さかり

尾州明院古今所々傳授之山有ての余に

ことのはの種をやうへし家櫻

住吉法衆十万句ニ

浦とをき姿の木の間は花もなし

ちるはなの木の間は秋もなし

夏

こぬ秋のもよほし草か荻の聲

おしましよちるさくらあれば時鳥

公方様(足利義昭)御入洛の御催の御使ニ濃州に下向して還

留申候中ニ夕庵(武井肥後守)興行

ゆきやらぬ山路ことほれほとゝきす

越州一乗の谷にて梅野興行

一聲や花の山風ほとゝきす

朝倉左衛門督殿(朝倉義景)新造ニはたんを被植て見せられ

し座敷ニて所望ニ(綿考に永祿十年)

うつしうへは千世の根さしやふかみ草

三段崎興行有しニ四月五日六日比濃州はくたりけるとて

すゝしさをみのこす庭の草木哉」

豊原寺見物にまかりしニ思ひかけぬ人に行あひて所望ニ

深山ちにしる人得たりほとゝきす

秋

鳴かりはたゝあま雲の名残かな

冬十月朔日雪のふりけるニ若州熊川(沼田光兼の城、幽齋室

の里)にて俄興行

神無月雪をみやこのしくれかな

ちりのこる枝や昨日のうす紅葉

うき草の心をゆつる落葉かな

天正六於江州安土越年

たちそゝふきのふを去年の春霞(再出)

同七年

あすと思ふ春やけふさへあさ霞

同八年

春といへは雪さへ花の朝かな」

同九年

昨日たつ春やむかしの雲かすみ

同十三年 八日立春

立そはん春の日数や八重霞

同十四年 十一日立春

まつ立や十日あまりの春かすみ

同十五年

去年立し春もけふこそ朝かすみ

同十六年

む月たつけさやきのふのはる霞

同十七年河内国高屋近所より人の所望ニ

年はこえぬけふ鶯の関もなし

同十八年東国御陣の沙汰有しニ

あつまちも手にとる春のかすみ哉

同十九年

としいひて春もむかへし今年かな

文獻三

百花の木のめもけふや春の雨

同四年

立そふ去年にことしの春霞

同五年

年はこえぬ春たつまでや八重霞

前テアリ
二月十七日於多門

出てみよしかし野守を花の友

堺南濱天神万句発句とて宗似所望作名

初雪をまつ風とをきはま邊かな

如云於昌叱興行

雨のおとや落葉にきはふ苔の庭

正月七日於山崎一折可有興行由有て所望申候時代作ニ

雪遠しわかな摘野に北のみね

三月十七日凌雲軒興行會に

風のかす花の香なひく柳かな

五月六日前田慶次(前田利太)興行於和泉式部

五月雨の新川なかつ山ちかな

廿日於圓隆寺

五月雨の名残ゆふ立雲路かな

六月五日大坂於宇喜田安津斎(宇喜田忠家)宅俄興行

すしさをまねくはかりの扇哉

八月廿八日於愚宅興行

年なみや半にかへる御秘川

卯月七日於東福寺不二庵和漢

ちらて花なをありとももの若葉哉

前テアリ
山崎より月次連哥とて所望ニ

朝川にさよ風うかふ木の葉かな

天正十三年十月十日

月影にさそう嶋門のさよしくれ

同十六年同(綿考正月)十九日於愚亭関白殿入御

治まれる世の(綿考に「聲」一字あり)しるし百千鳥

同廿八日溝江大炊(溝江長成)新宅ニ而俄興行

ひともの梅かゝあまる草木かな

朽木信州（朽木元綱）例年発句所望也ことしも又思案して下すへき由云おこせられける廿日餘りの程まで春さむき雪ふる年なれば

雪さえを花にまたるゝ深山かな

廿五日於宮内法印月次の連哥代作

花をそし柳に匂ふ風もかな

元龜元年正月朔日於濃州明（綿考にこの下「二字消て不見」とあり）院興行

正月十三日立春有ける元日

年はこえぬいまいくか有て春霞

二日濃州友閑（松井友閑）興行

閑けさや友うくひすのやとの春

十九日長床坊興行里坊之井の森庭_ニ有心を霞こそもりの木の間の春の月

廿二日臨江齋（里村紹巴）帳（張）行

春はなをかせのいとなき柳かな

江州矢嶋より人の所望

江の水のみとりはあさき柳かな

四条道場万句

一年の花の色なきさくらかな

七月十七日於坂本明智城新宅

ときは木は首にやさかん秋のかせ

十二月四日於真如堂蓮光院

雪も花にちりまかふ鐘のひゝきかな

元龜三年十二月十二日於矢嶋勘兵衛新宅

雪になをふきあはせたる軒はかな

於丹後昌叱下向之時（綿考に「天正十二年八月廿五日昌叱初

而於丹後田邊下向之時玄旨君昌叱両吟、何人」）

敷袖やはつ花すゝきかり枕

八幡宮ちかき在所より所望

つむ袖も猶わか人とわかな哉

墨齋玄通從薩州罷上りける_ニ興行

めぐりあへは雲井やいつく春の月

玄通張行

花とをしいさなくさめに嶺の雪

於玄仍（里村玄仍）興行

道はなを隣ありけり雪のやと

奥山佐州二七日_ニあたるとて道庵興行懐旧連哥

袖よりや露にはつるゝ糸柳

聖門様（聖護院宮道澄親王）御興行 文祿四年

春風はたゝなよ竹の柳かな

於伏見宅山岡道阿（山岡道阿弥景友）興行

江のこゑにしはしは残せほとゝます

吉川藏人（吉川廣家）於雲州富タ之城興行

椎柴にふらぬ霜見るうら葉かな

牛（半）松齋宗養（谷宗養）三十三回忌（文祿三年）日霜月

十二日懐旧之連哥借本因坊興行

時雨るゝやかたみの雲のいくめぐり

廿五日不知丸初て執筆有へきとて也足軒（中院通勝）御興行

文祿五

梅か香も木に入ぬへき行衛かな

五月三日於江雪（秀吉御咄衆）新宅

むら草やたゝとこ夏の花の庭

九月於吉田興行

つま木こる宿さへ秋の山路かな

十月十三日於兼如興行

とふ宿のかこと成けり夕しくれ

於幸前興行

散ちらす雪さへ花のみやこかな

有人家を子ニゆつりて後會とて所望ニ六月十五日

すゝしきの風をつたふる草木哉

照高院（道澄親王）可有興行之由有て発句つかうまつるへき

由有て御催ニ

花の香に月待いつる雲間かな

一もとの梅かゝあまる草木哉

如水（黒田孝高）上洛之時東紀州興行會ニ（慶長元年）

友まつや人の心によはの雪

懐旧

すみ染のゆふへや名残袖の露

同

ちれはこそさくらにたくふ木の葉かな

小夜しくれ雪におとろく朝かな

西に行月はくまなき木の問哉

於東条紀州如水餞別之時興行ニ（慶長二年）

おる枝やあひにあはをの糸柳

道阿母第三年追善

明やすき一夜の夢のみとせかな

道阿母義七年忌追善

蓮はの露さへ玉のうてなかな

うちなひき月待露の草木哉

やみならぬ雪もあやなし梅の花

花の香にいとほて霜やまつる風

由己追善の千句興行とて賀古勘左衛門所望

はちすはにいつ置そへん老の露

幡州書写山ニまかりけるニ庭前の梅のみち所々ニ残けるを

見て

荻の葉に秋風ゆつる扇かな

春部

都にのみとなにおもひけん

けふ立やもろこしまてのはるかすみ

しらぬむかしも面影にたつ

うつりこし神代のはるの朝かすみ

かすみのうちのうくひすのこゑ

かそふれはけさあらたまの年こえて

とめくるやとはふりはてにけり

きのふけふとはぬ人まつ花の雪

かゝる中をはなとへたてをく

うくひすの寝ぬよのはなに聲はして

杉むらのおくなを花や散ぬらん

布留野にたかき春草の色

わかれてたにも明やらぬとこ
横雲のはなのはやしに宿かりて

水にうつすもたゝ春の花」

江をかけて霞にもるゝ嶺の雲

かれし枝より匂ふ梅か香

花かめに程へし水をあらためて

春はたゝはなに心をかけそめて

さくらにすゝのをとそたえせぬ

をのつから咲初にけり春の花

かきにうつさぬつゝし山ふき

秋にしらるゝかせのたひく

すゝきかとなひく芽花の露散て

もろ友にしひのひくの袖ふれて

たゝひとえたはゆるす花もり

匂ひたゝ花より花にかよふらし

梅のかきねの菊の下もえ

かりなく方の明ほのゝ春

月にしくわか草まぐら夢絶て

河へにゆるき春のあさかせ」

日のうつる方より声のつのくみて

かたへ色つくあさちふのかけ

とめて入小野のしのはら花ちりて

露のいのちのたのみすくなき

うへしうへはかならずさかん花そのに

たのむつかひよいつはらはうし

花さくといへはまつをく鞍馬山

おはしまの花はかたえに咲出て

はしのむかひのきしの歎冬

すたれをまけは鶯のなく

いたつらにひるねのまくらおとろきて

かすみなからに明ほのゝいろ

すみ染のさくらは名にもあらはれて

まへわたりをしとかむれはとふ

守はなも名乗きゝてや手をらまし

花の香におとろかされし今朝の夢」

梅にこてふのまれにねぬめり

はなはみなあらしのかせにさそはれて

こほりのひまにしろき川なみ

とくもかきりのしるきまきく

おる花のえたまてはへる玉かつら

うち見わたせはとをからぬ山

花に行道は岩ふむつゝらおり

籬の胡蝶いつちにけん

日のかげのけきのほとにもさえかへり

うすきにし日のかた岡の山

かつらきや霞のころもたちそめて

家路へたつる山のはるけき

はなゆへのたひはゆくくなくさめて

かへらんも片野の花に日は暮て

霞にかゝるよとの川舟

うきたつもあま雲の空^{（マ）}

宵のまの月のたかこち音絶て

ひゝき出たるかねおほるなり

花にきて袖ひきかつく下ふしに

きえなんのちもしらぬはかなさ

はなは雪とふるまで人を待たて

咲かくす木すゑあらはに花落て

春もさひしき軒のつまなし

人のとふ道もむもるゝ蓬生に

花のあたりのむはらからたち

いつるをまゝの故郷のそら

ちるまでと野山の花のなかめして

かつはたゝ散そめしよりさくら花

春のなかはのくれなるのむめ

ちるはなを柳の露のかけとめて

梅かゝふかきさほ川のみ

おらせしといとふに花を問もうし[「]

うくひすのなく野への梅かえ

年々のはなのこゝろを身にしりて

うへをけはたく賤かつたなし

春の山路にまよひ行袖

花の香を送るあらしの吹捨て

いたつらに親のいさめや過ぬらん

夕かせあらき木のめ春雨

うくひすの音に越る太山路

明る夜も霧に霞にわきかねて

霞にめくる山のひとさか

らうはたゝ花の木の間の初瀬寺

けふをし春のかきりなるそら

鶯のはつねほのめく雪の中

ちり出る椎の葉分の花のいろ

春のちせの山かすむ空

井せきをこゆる春雨の浪^一

若あゆの水のまにゝ落そひて

かこひすてたる春の松かき

軒はまでうつもれはてし雪きえて

かへりこん比をつけこす遠つ人

花ちりつくすみよし野の山

春としも思はぬはかり猶さえて

もゆるともまた若くさのいろ

うへをくもよし有けなる花のもと

さくらのおくの神のこほこら

もる人も見えぬ一木の春の花

いつのひむろの山かすむあと

くれをかきりに駒なつむ道

花さけは山より山の奥にきて

古はたのさかひもさすか跡有て

若はにまじる荻の焼原

いかにして筆にはかきもつくさまし[「]

かすむゑしまの明ほのゝ浪

空にたつたる雲の村へ

一二さえつるひはり聲きえて

まくらのうへにちかき松風

あすは又花にこゆへき峯の雲

いかにわすれん人のおもかけ

うへしよも夢にうつろふ春の花

心ははなの外にうつらし

さくらちる池のかゝみの水すみて

やすらへあへぬ春の鳥の音

かり衣すそのゝ霞たちきえて

鶯のこゑをしほりに山こえて

里は野かみのかすむ一かた

雪はらひ行道のすゑへ

乗馬もはなのあらしになつみきて

行袖しけきしかのから崎

春の日のなからの山の花咲て

おもふことなきは花見る心かな

松もおとせぬ庭の春風

すてはつる世もえやはやすかる

吉野山かせ吹はなのなかめして

杉むらも花の木の間に明はなれ

霞にしろきふるの川浪

月に花に都のはるのしたはれて

梅かゝなからくらすなには江

うきおもひにはかゝるむはらか

手はなせる小鷹のへをのなかき日に

いはねくの草のみしかさ

日かけますたるひかつくとけそめて

そむきへにわかれぬる人

一枝もゆるさぬはなのあるしにて

昔地ははるもふかきあさ霜

山かへる岩のはさま田すきやらて

わかれもはてぬけさのあはれさ

よこ雲は咲そふはなの木のまにて

末のゝかすみたちきゆる比

一村の雲に聲する夕ひはり

おやのいさめのおもはるゝのみ

昨日けふ花の木のめのはるさめに

くるゝまてわかれかねたる花のもと

春になれぬるそのゝうくひす

おりをきてかはけはそゝく花の露

蔽にそふやつゝしなるらん

あきになすにそいとゝかなしき

花ちれば春も野分の風に似て

さかぬより心はななにさきたちて

驚きなく雪の梅かえ

すてさりし身にたちかへる人

去年の春命かけつる花咲て

かすみのうへの槇のはの霜

春さむみ宇多の氷室のとちそひて

はるふかき梢の月にかせおちて
青はかちにもまじる花その

つもるうらみは露のかすく

かせならぬ雨にも花のまつ落て

たくひなる心の程やしらるらん

帰ればかへる鴈の一つら

けふこそははなさかぬ忝もおしほ山

霞にきえしあけほの雪

友なふも哀老木のはなの陰

みとりかへるも松の藤なみ

霞の衣うすき半天

かせさそふ花に伊駒の雪きえて

しろきか後のくれなるの梅

うくひすの霜に朝日を待とりて

出なる燈籠のひかりかゝけそへ

繪にかくはなもあかぬしたふし

夢よりのちも片敷の山

めかれせぬさくらちりつむ木の下に

くれつうすきともし火のかけ

岩つゝし春の名残に咲出て

春もたゝ深谷はあさな夕きりに

むすほゝれたるうくひすの聲

春なりけりなあをむ草く

かすむ日のひかりも室の戸の中に
人めなき花かとおれはとかめられ

霞のおくに犬はふるくれ

神かきやこもるかきりを待くて

花の木のめも春風のえた

さかぬよりむかふ斗の花のもと

池のかゝみにうつる梅かえ

おほつかなきもつくや家く

さゝかにの糸にしけみのはな落て

なひきそはん行衛見えけり春霞

柳かせふくその若草

日数へてうつるふ後のはなの陰

春の水行岸の山吹

この春霞たち出てみよ

かけそふる野守のかゝみ遅日に

霞のひまの末の忝かき

水ぬるむ川はあさせのふしつけに

たのむつかひよいつはらはうし

はなさくといへは先をくくらまやま

したふも友のわかれぬるそて

ゆかりをやゆるさぬ花にうつすらん

ちる比は浪にもはなや咲ぬらん

梅ひきかへるかきの下水

おもふとち見るへき花に立別

春になみたをそくさかつき

春の夜残す月の川上
橋いたのしろきをみれば花ちりて

あやしかりけり仙人の道

みねたかみをしへのこれる花も有や

常なるはをのかかしらの雪にして

ちるはることのはなの下かけ

たつねくる人にはいまは遠さかり

ちりつくしたるはなの山さと

そのゆかりそときくにしたしき

さきてちる花の山ちの姿の風

まつかせかなし雪の降あと

苔にちる岩もとさくら花くちて

さそはれさそふ袖のかへるさ」

しりしらすみな家つとゝおる花に

なれきにけりなけふことの春

あたらしき年をむかふるから衣

たひのやとりのうしろめたしや

夕あらし吹たちぬへき花にねて

つかひそ文を送りすてたる

花のえはこけかはかりにうつろひて

山ふかみひとりなかわる花の本

友なひかはせ老のうくひす

ぬる鳥もさはきそいつるこゝかしこ

はなにおちくるむさゝひのこゑ

やきすてゝをく野へのかたゝ

あさりつゝ子を思ふ雉のはね音に

大井のやとり行てとははや

さくはなもいかに散らんあらしやま

一度にさかはいつれかはつさくら」

むめうつろへる軒の山かせ

あたなるにたのみかけての物思ひ

鳥はたちでもちるはなのすゝ

よる浪くれてかすむ川よと

爰かしこ残るはこそあしる木に

さりし佛のあとのとしゝ

あふきつゝ絶ぬ春日の神まつり

なにしかあたし名はたちけん

一かたと定かねたるえににして」

於昌叱（里村昌叱）興行二月廿三日

古事をさらに残さぬ春日かな

人の心やわかつはなゝ

秋草もうえしかきねにもえ出て

はれまみせたる雨のしつけさ

つれなき戸さしゆるすかたはら

守きつる桜かえたもはなちりて

くれぬれば虫のねしけき砌にて

すゝみなれつる秋そ身にしむ

身にふれころもなつはくるしき

くすたまのいとや袂にみたるらん

ふたりとはたのまぬきみかよを知て

紹巴

昌叱

白（聖護院宮道澄親王）

玄旨

なに入つまにかこちかけゝん

分いるかたはふかくさの谷

月にしもふすゐのとこやかへけらし

あたなるはちきりあまたの頼あれや」

ひらきひらかぬそての玉つさ」

夏部

かすかになれるよとの川舟

ほとゝきすなのりすてつゝあくるよに

夏山ちかき庭の池水

ほたる飛蟬啼すさむ風暮て

茂りあひぬるなみのうき草

うつ木咲かきほの柳枝たれて

のこるはまれにならのはかしわ

行かへる人はあまたの神祭

ふる葉もや竹のさ枝にまじるらん

作りすてたるしつか瓜垣

色つけるかせのいなはのそよきいて

ふもとをちかみ鹿の子ふす跡

松かせや夏をも更にしらさらん

をそくさくらは若葉たになし

忍ひかねたるよひ／＼の袖」

涼しさを松こそならせ秋の風

おち行水の浪に入をと

「雨すくるやなせの鮎のむら／＼に

いくせになりぬ末の河水

ことなしといのりこし身の夏はらへ

軒端あらみにすみなせるあと

夕立の空さりけなき月のかけ

たちなれにけりくれことのみち

しつかやのかやりしらるゝうす煙

しける木すゑの花にほふかけ

むらつゝくさかひのあふち風過て

とはん日をまたみぬ人にたのめをき

郭公まつみ山へのさと

氷る入江にふくる松風

影も猶すゝしき月に舟とめて

ふりえたるしかの都は跡はかり」

雲もゆふたつにほのうみつら

一かたになる竹のすゑ／＼

草たかくしけるそのふに風落て

しくれめきたる急雨の音

柏木のしける下葉のかつおちて

夕立は山のあなたやめくるらん

照日なからもかせそすゝしき

つくりそへたるかけの荒小田

五月雨にしつやのますけ打みたれ

夏草のさかひ村／＼みたれあひ

野中の田面うへすてしあと

残るひかりのかげのさやけさ

朝露に野ちの螢やましるらん

かは衣きたるすかたのたそかれに
みそきしつゝもかへるさのみち

そこしもなくふかきあけほの

半天の月にまたるゝほとゝきす

妻恋にもかなくほとゝきす

明やすき神南備山の月出て

あらためつゝも神まつりする

葵をや花のかさしにたくふらん

残ぬるあつさわするゝ夕ゝ

おかに色そふとこ夏のはな

くさゝもひとつみとりの雨の内

昨日かうへし早苗ふしたり

まつよひ過る月の山かけ

いづくにか枕ゆふらん郭公

たゝくもしはし明やらぬ門

いきたなき夜はを水鶏や諫むらん

あつさわするゝ河水のをと

さしよする鶺鴒舟のかゝり焼けちて

なかむる瀧はそこしもなし

しけりそふこのまに遠き水無瀬河

うふるみきりの姿のこたかさ

住よしの神のたのしむ早苗哉

行雲やとをさかりてもきえさらん

はたるみたれてよるをまつかけ

あれわたりたるさとのかたはら

せきやるも未水無月のかきほ田に

あふきをならすうたゝねのとこ

手枕にかのほそこゑのうつりきて

よとのわたりにけふもくらしつ

五月雨はまこまりほすひまをなみ

すゝしさならず暮ことのそて

御破川いくとしなみをこしつらん

山をうつめる夕くれのそら

とひかへりなく音あらはす郭公

すゝしき風の吹そひにけり

こぬ秋を日晚の音やさそふらん

あつきひかりももらぬ山まつ

かへつゝも谷の氷室のかまへして

かへるやいつこうかふつりふね

むらあしとみしも末はのしけりあひ

たゝ一夜いつきの宮のかり枕

いつのなつにか又あふひ草

思ひねにかたしく枕ぬれゝて

郭公まつ森のした露

うたゝねもほりな下まつさよ枕

たちはなかほる山郭公

山にすみしをめしいたす人

君かため守も氷室の時過て

みなきりおつる水かすかなり

かゝり火も朝けになれるうかひ舟

五月雨は川せもしらぬうきも哉
枝もひさ木のしけりそふかけ

えらふにもるゝ哥ははりなき

老たるも小田のうへめにましはりて

霜の籬あらはにそなる

うりつるの露あたゝかにうちけふり

めくるもはやき月日とをしれ

うへおくもしける田つらの水車

すゝしきは風なきとも木陰哉

み谷の水室もりすてしみち

山より山のみちのさかしさ

亥子臥谷の下柴うちしけり

音つれ来つゝ立帰る友

明かたの雲のうへなる郭公

秋 部

さむれはおなし手枕の夢

荻のはに夜さむおほゆる風ふれて

むら雲をあらしのはらふよるの月

けしきはかりにしくれせし秋

なきよる方のかけの松むし

日くらしの聲や夕をさそふらん

霧のまかきそ暮わたりたる

しほかまのむかしをのこす月すみて

月は出ても雲の半天

影たかき秋の螢の消やらて

しくれめく風のをとなを身にしみて

かた枝の梨の葉かくれの色

おつるなみたの露はらふ袖

物思ふやとりをかりの音に啼て

寺はおくなる山そはるけき

小初瀬や霧吹のほる谷風に

雲にはとゝきすくる聲く

さをしかの峯にふもとに妻こめて

へたてははてぬ月のうき雲

山かせに秋のしくれのさそはれて

もりわふる山田の垣ほかたふきて

かけひの水の月のさひしさ

ふす鹿や霧のまにく見えつらん

うらかれわたる若草の山

ひとりある身を誰にまかせん

古さとの萩の下はもうつろひて

秋のしくれのいつち過けん

槲木のはのみちの中にあらはれて

ふしみのさとはころもうつおと

はけしさや秋に初瀬の山嵐

月をたつねて立そ出ぬる

さをしかのつれなき妻やしたふらん

松のしくれや秋風の浪

ほのかにも岩間になひく花すゝき

霧間にさひし松の一もと

さゝ波やにほてる月の明過て

袖にそゝきし秋のむらさめ

四の緒の涙もよほすしらへして」

入かたまとふ有明の月

さをしかの妻やふしとをかへぬらん

のとかなりしもかはるうら風

真葛葉の夏と秋との色わきて

松風にさそはれ出し月の暮

のこるあつさにたえぬうたゝね

明はなれ行月のうす霧

かへる野におしか妻とふ聲そへて

野分の跡の風の音つれ

散つくす色もは山の村竹に

手まくらをたゝそのまゝに片敷て

おられぬ月の露の荻はらハキマツ

かさなれる月の曇を風もふけ

霧間にたてる檜原積原

うちさやかたるさゝのはの露

野をとをみ秋に鹿子の立出て」

のこるあつさにいらぬ園の戸

秋もまたかやりたく火の下もえて

ちかゝらぬたにさは鹿のこゑ

淡路かたをとこす秋の風更て

とち置し窓をひらけは秋の風

むくらにしけき露のふるあと

月更ぬれはかたゝの袖

まくらにもかゝれぬ露の花すゝき

谷の戸よりや日はうつるらん

有明の入さは雲にかくるひて

影はたゝひるにもまかふ月にして

しほれてかゝる朝かほの露

ひろひつくして爪木もとむる

佗にたる里や落穂をたのむらん

幾度か秋のけしきに時雨らん

もみちかつちる山松のこゑ」

霜も岡への夜寒なるころ

いつしかと聲もそひ行月更て

とふ螢風の行衛に打みたれ

かりの聲まつ夜半のしら雲

かたふく月のあけかたの空

軒近み萩のはのほる露をゝもみ

露になみたにうき袖の上

鴈なけは冬枯ちかき花すゝき

なみたにやつ袖の月影

尸なけはお花か色もうら枯て

竹のは末の打そよくみゆ

夕闇はしはしか程の月しろに

くれほのかなるを車のそて

はるゝとよとのや月に成ぬらん

きくにあやしき道や仙人

ふく笛にとをき鹿のよりにてきて」

きりのへたての里のはるけさ

あふくまの川邊に秋の日はくれて

いるかと月はかすかなるかけ

笛による鹿を矢前のあつさ弓

水おつる岩根すゝしき道の末

一むら雨の菅のはの露

きゆるあとより霧まよふ空

はるゝと横たつ山のみねの雲

夢になせとの月のそひふし

たえにけり枕にちかきおきのことゑ

鹿の音や明はなれても絶ざらん

しくるゝ秋のはやましげやま

ともなふかたは月の夕かけ

日晩のなく音に虫の聲そへて

見えつかくれつ袖のおもかけ

野は霧のあなたになひく花すゝき」

わかまたぬ夜も月はそむかし

あま衣くれ行波にうちそへて

竹のはもおほふ軒はの霧降て

ひるまをすくす朝かほのはな

柵はや聲さへさゆる夜はの霜

もす啼かたはあけほのゝ月

みになる梅のたちえ色付

しは栗をそのまゝそのゝかきほにて

萩かえの月もてあそふ袖みえて

霧のうへなるたかまとの山

はらふも霧のしげきあさちふ

玉きはるみきりも秋の野となりて

あとさきにしもなれる鴈かね

この朝けいなおほせとりのうつりきて

うらかれまでの色草の露

真葛はのかせももらさぬ籬にて」

しくれめく風の音猶身にしみて

かたえの梨のはかくれの色

鹿の音や明はなれてもたえざらん

しくるゝ秋のは山しげやま

友なふかたは月の夕かけ

日晩のなく音に虫の聲そへて(再出)

静なるまゝに心のすみわたり

人まつ宿の萩のうは風

心つくしになれしいく年

秋ことの木のまの月も袖の露

ほとゝきすきはきくか聞かは

更るまでねよとの鐘に月をみて

絶ぬしくれば松風のおと

影のほるたかねの月に雲つきて

日のうつる野は淡雪の降きえて

山のはつかに有明の月」

雲にひかりのうすき月影

いなつまの露のやとりも月更て

たひころもけふたちてたにはやかなし

秋をしらすたまほこの露

結ひをくかけもちいさき草庵

かりわたす田のひたのかけ繩

更過けりな月のさよ風

すゝしさも身にしむ露のをか野へに

秋のいろにももるゝ恚はら

民の戸にかけほすいなはとり入て

たひくゝに秋のしくれの打そゝき

霧のうへなるかせのうき雲

さひしきは田面にかよふ鹿の聲

やふるゝかへになくきりくゝす

恚の木かけも明そ過ぬる

高砂の尾上に月のかたふきて」

舟はなみまに見ゆる朝きり

入海は真野の尾花の外ならて

秋の夕日は影うすくなり

稲妻の雲間に月の照そひて

軒はにちかくそよく荻のは

またあらし小鷹とりかひかへる野に

冬 部

はやはつしほのあらし浦風

磯山の恚の葛葉の一しくれ

みそれにくるゝ一むらのみち

柏木のもとつ葉まつも落添て

浪間をしのく舟のおもかけ

雲にとふかりかね氷る半天に

しめおくもたゝ芦垣のあらはにて

うへしもかるゝ霜の下くさ

おとにしくれのふりとをる跡

木枯は真木のいたやに遠からて

霜まよふよのあり明の月

千鳥啼河原のちはら枯立て

浪のやゝたえくになりそめて

あさき川せやまつこほるらん

霜みちて有明うすし星月夜」

さゝ葉かれ臥もりのした道

たつともあらず千鳥あつまる

引すつる冬田の庵のなるこ繩

残る日かけもたえくゝの道

水氷る田中のあせの馬さくり

あさき野原となるも程なし

しけりつる蓬か杣の冬かれに

さひしさやたゝ五月雨のうち

ことつても絶て程ふる雪の日に

とる山しはの人聲そする

鳥叫にまかせて鷹やはすらん

ぬれつゝも行片山の雪の日に

袖にいくたひ鷹とはふらん

かよひちも稀に成ぬる雪のうち

氷氷る江にさはく鳩とりの

わけし跡あるみちのへの霜

冬枯のまくさなからも刈かひて

音はあられのとを山の雲

手はなせる鷹は鈴にやしらるらん

朝またきよりさす舟の上

里人の雪にもかよふかさ見えて

五月雨は晴間しはしの程にして

雲のうへなるふしのねの雪

むかひのきしのとをき水上

木のはみな落るみむろの山嵐

あるゝ田面や又つくるらん

寒かへるあられとたえてうつる日に

はらふあとより雪をもきそて

冬枯のおはなかもとの風をあらみ

嶋の外までおさまれる時

村雲の時雨し月もあかしかた

雪もまたすそ野に富士の(不説)□

吹たゆみたる木からしの森

月に吹風やあらしにかはるらん

木ゝの落葉にもるゝ山松

入しほはやきはま川の音

冬かれのおきの下はのおれふして

春はかすみにひかれぬるそて

鷹とはふすそのゝ雉子啼すてゝ

暮をおもふ中のさかつき

もゝしきに三世の佛のとなへして

昨日けふかとをくる春秋

苗代に見しもないはの冬かれて

行くらしつゝはるかなる山

冬たつと朝時雨せし空の雲

すさふをまゝの木ゝの下風

白妙の落葉かうへの霜さえて

御まへの神楽神もうくらし

月寒み雲井の庭の更る夜に

ふむ跡しるし今朝のうす雪

春日野は冬もを鹿の臥なれて

山嵐あらく吹もとをれり

雲はたゝ跡もつゝかぬ一しくれ

ちまた行道さへ絶し雪あられ

かりはの犬の鳥跡まかへる

時雨の雲のまよふおりく

きのふけふうす雪しろき北の峯

たちもやよるとまつ袖はいさ

きみ一めみきりのすゝき冬かれて

雪はたゝつもるか上に又ちりて

枝もかれたつそのゝ竹の葉

あらためすふり行まゝのすみ所

雪のなかはにけふるすみかま

おき出ぬれは月さむき山

埋火を明はつるまで友なひて

つもるか上のしら雪のころ

過すへき三冬の薪こりをきて

なかれよりてみきはまさされる氷哉

河よと遠きせゝのはるかせ

袖のゆきゝのたゆる春日野

手向山かせに紅葉のちりはてゝ

冬はいづくにかへる鹿の音

高砂の尾上は雪にうつもれて

雨になるへきうら風のことゑ

枯残る葛葉の入り影きえて

いかにかさなる霜夜なりけん

かせの音や都の外の雪の峯

冬の夜はいくねさめにか明ぬらん

雨もあられになれる村竹

すかの葉のかるれば白き草のもと

をく霜さゆる岩のはさま田

ちかき秋しる木々は色めく

冬の空も又はつ鴈の啼に似て

わけまよひなはいかにむさしの

雪になる春日の里のかへるさに

たゝしき道にたのみこそあれ

鳥の跡をかりはの犬のすてやらて

氷ゐて行水ふせく河邊かな

あしのかれはにましるうき草

このころ雨そふりつゝきたる

川音や山の木のはをさそふらん

池のつらゝにはふく鴛鴨

岩かねの姿のはしたり雪降て

はつ雪はところゝにきえ残り

宮人きそひひくくつのと

荒たる句

かねはきかねと入相の比

古寺のあと野原の花ちりて

くちほの中にまじる紅

小柴ゆふかきはなてしこさき出て

つたへにと思ふも人はうけひかて

またうることにそふるつま音

かたりてうきを誰なくさめん

使さへおなし心にうつろひて

恋部

いたつらに身のなりやゆかまし

いわけなき中にも恋のあさからて

今こんの人に心のいさなはれ

おもかけのみそたちもはなれぬ

思ひの程そしのひかねたる

一筆とそむるも文はこまかにて

うかりつる人をも思ひすてやらて

たえてのゝちもうしろ見る中

さりともと月やかことに待ぬらん

君もきけとかころもうつおと

しのふともまた宵の間はまてしはし

むかへのくるまおとそとゝろく

ねてなくさまん思ひともやは

恋をわかものやみとのみいひまかへ

ゆるさぬあたりまへわたりせり

うつゝともたのむる夢のうきはしに

のとかにもさよの枕を敷かへて

夢をまつとかかへす衣手

はかなきはなけの情もしたはれて

又こそひらけふみの一筆

つれなきにたのみかけての心しれ

たゝあふまての神のしめ縄

あふをかきりといふもはかなし

占かたに契の末をまかせきて

ちるとてもよしやおしまし春の花

さくらをおるもこぬ人のため

またるゝよりも待かつれなき

あた人に何とちきりをかけつらん

かゝるをこそはなさけとも見め

たえず猶かよふは夢のうきはしに

つらき心のものわすれせよ

年つもる文のかへしの一筆に

昔をいまのおもかけのゆめ

老のち恋しき人を思ひ出て

衣の後の枕によりそひて

人まとはせる有明の月

うたひすてしも名残こそあれ

にはとりをひとりねにきく今朝の夢

あしるにうつる月のさひしさ

よるかへるむかへもあせしむなくなるま

その人の身にそふはかり思ひ侘

ものゝけしきもたゝ心から

二道はふかきねたみもいかにせん

雪ふる夜半をとひかへる中

哀しれ秋の野もせのうき思ひ

妻こふしかのわれおとらめや

思はず時のうつる程なき

初夜もはや更行かねに人待て

もろともに見るこそ花の色ならぬ

さくらか枝もかへす玉つき

前わたりとかめられてやよきぬらん

忍へは犬のこゑさへもうし

とふ人もそこはわかしうきすまる

をひうつまてにおやさくる中

をきていにけんあふきあやなや

その人と思ひあはするこゑにして
ひくおりくもたゞひとりこと
君かため馬もおりたつかよひちに
あはれにもいつをかきりの物思ひ
つらきか中はいのちさへうし

身はこりすまのうらみしもせし
わすられし中も今はた立かへり
心をやるもひなひたる中

ちかひてやうちつけにしもちきるらん
かくるなさけのすゑもあやしき

あた人はたのまれかほやくせならん
わすれししたゞ一ことを身にしめて
打もおかれぬそての玉つさ

いもにはなれし心あはれめ
いもゐして日数はとふる神詣
袖こそつとへ馬よ車よ

かことをもいひ送りたる関むかへ
いつれかいつれことのはの道
つらきをは使かへてやしたはまし

うらみつゝ猪ものゝけの立さらて
ころのなしか人のおもかけ
待人にうち重はのから衣

ひとりふせこのけふりたつ暮
身をなれさる人のものゝけ
ならへぬるまくらも太刀もとりそへて

色にいてしの思ひくるしき

うらむるをかことゝ中やたえやせん
おとそふやそのあかつきのかね
あはぬよも身はならはしの衣くゝに

ひとりのゆかは心康しや
忍ひよる人たかへともまたしらて
うつゝはいつら夢の手枕

物のけもころのなしをはしめにて
燈のきえてのゝちは物さひし
とはぬにふくるねやのさむしろ

なをさりの程こそたへし恨なれ
しうねきもはた名のる物のけ
まつ程ひさし神本ノマまるには

あふことはいもゐるの目さへさはりにて
さはりなきよもうたかはれぬる
かならずとちきるゆふへの文を見て

いはけなきにもちきりかけつゝ
おもふそのしるしの帯もおほつかな
生れなん後の世までの契りして

おもふしるしの帯のことふき
浅からぬえにしやともにわたり河
あはれいく田のいにしへのあと

よるへそこともしらぬ身そうき
たゝよへる月の夜床のなみた川
あたのちきりよ身にしむもいな

芥子の香は思ひもかけぬ衣手に

残る暑のひとりねの床

身を秋のうらみつもれる物やみに

月にうらみのかすやかさねん

君かためうつとはしれな唐衣

わかれてかなしいもとせの中

天地となるを恋ちのはしめにて

たゝはいかにとかねておしむな

わかれ行心かるきをよむうたに

かたみのあふきのこるあたしさ

釣簾のひまたゝそのこゑとさたかにて

しつかなるまゝに心のすみわたり

人まつやとのおきのうはかせ

うらみこそいひ出はやの折ならめ」

なみたさしくみ打むかふ人

あはれにも主定るになみたおち

ありしなからのわかみともかな

あさくなさしの恋すてふ中

つるにわかあふせをたのむなみた川

ぬるともそでの露ははらはし

うらむるとつれなき人もしれかしな

いはけなき程より結ふ契りにて

しるしの帯にあはれさそそふ

人は昔せすかせかよふくれ

待よるはしはしまとろむ夢覚て

みたるゝほたるそれかあらぬか

玉しるもうかれしはかり恋佐て

うへこす水にはしとしもやは

見し夢の枕なからになみた川

いなせきゝつゝ思ひたえまし」

ことよきに定むへきこそ使なれ

たゝにしもあらぬ人香は恨あれや

物のけしきとしりはてにけり

空たのめなる契あせしも

中たちのことよきみに任せきて

月もわかれしなみたをく袖

君に我あふくま川の名もつくし

忍ふともまた宵の間はまてしはし

むかひの車おとそとゝろく

なみたの衣うつそめ

おもふそのあまたの跡におくれ居て

たちもやよるとまつ袖はいさ

君一目みきりのすゝき冬かれて(再出)

かはる心やまついくへなき

うらむれはあたなる筋にまきらはし

笛の音におもふ心やつたふらん」

見まくほしさにゆきかへる道

はかなくも絶ぬちきりの程見えて

あけぬくれぬとおもひねのゆめ

海に入つゝ落漚つなみ

硯にもむかふになみたもよほされ

なみたのみならず硯のもよほして

衣のつまも引へたて行

こひ侘てうかるゝ玉よまでしはし

さむるに酔の心しるしも

引とゝめゆるさんことはかたき夜に

わひつゝも又寝やの戸のうち

まつたひにあらぬさはりをつけこして

かたみを見るもうらめしきのみ

おき所なきとて文やかへさまし

かたしきわふるさむしるの月

はし姫の思ひも身にやしらるらん」

そふにこゝろのなをふかき中

ものゝけにうらみのほとのはらはれて

なこりそとふるきころもを引かさね

うとき人まつよもきふのやと

ともにかへさをしたひやはせぬ

待夜はをふかしゝてとふもうし

とひよれはなを胸そとゝろく

契をはまかするもうきうらかたに

八聲の鳥を何かうらむる

有明の月のもよほすわかれして

きくもたゝ其名残そとむつましみ

別れてのちの庭鳥のこゑ」

雑部

ものかたらはゝ耳もこそあれ

六十にもおよぶを友となれゝて

鳥とひ行岡のへのまつ

梟のなけは明ぬる短夜に

あくるまでめてし名残を月もしれ

置はかりなる萩の戸の露

山にしいれはよそこひしかる

たらちねの親の思ひのいかはかり

後までものこし置名を思へたゝ

代々にゑらへるやまとことは

色に吹風もはやしに昔絶て

竹よりおくのそのゝむら草

塵をたにすへしと思ふ朝清め

筆に硯ならす手ならひ

愚にも学ひしまゝに年たけぬ」

たのむ心をいかに仙人

故郷をおもへはとをし旅の空

わたる心もなをすみた川

なき跡にうへおく花をかたみにて

春もあたにやくれなるの梅

たもとなをこゝろゝにつらなりて

くらゐしなある雲のうへ人

くるゝかと思し雨の日なかさ

釣舟のうらゝにかへる奥津なみ

霧の霰はしくれめくなり

むす吾にや、萱ふきの色朽て

うちそむきぬる面影はうし

哀またまくへきこそはしゝまなれ

にくまるゝ心こそたゝこゝろなれ

やゝもれそむるふたしえの中

音ものとかにこくなにはふね」

淡路かたせとのしほかせ吹こして

おほけなき契りなからもかゝりきて

老の命やまもる氏神

佛にとのみよろつをそおもふ

なき人の跡をしはしはかなしみて

休むまにをくれし友も待つれて

わたす小舟もおもき山しは

あふことのかきりもなみた落添て

をくりいてゝのたひのさかつき

いつち過らし小車の音

川かせの霧をよと野に吹こして

みるゝ舟は波のをちかた

つくりなすみきりの池は海に似て

夢よりのちの黍風の音

しつかなるなみに入江のとまりふね

またいひしらぬことのはのみち」

うら近く唐人の舟よせて

忘すも遠きさかひのことゝひて

出にしかたのこやみやことり

あかたなの上に佛のかすおほみ

七日ゝのいつめくりけん

めくみたゝなをあさからすあふきゝて

をくれはさらにあまのはころも

枝もくちたる花のあはれさ

跡とふは稀なる春の古塚に

世をのかれての人のはてゝ

佛のみとをえたる住居して

のちの親ともさらにおもはず

籠のうちにまははる蠶の年をへて

ひとりのみうちかさねげりから衣

耳なれにたるうたのことのは

露にふりなすけきの淡雪」

朽にたるかやゝの軒に目はさして

玉の緒もいまは中ゝ絶ねかし

友なふもなき老のはてゝ

ゆかりなを年の始はあつまりて

親のあとをしとへる法の會

・しなをわかつやねかふ後の世

おひたゝん行衛となへる黒髪に

のこすかたみの文はあやなし

老の後はるけきる中わたらひに

結ふ手にわき出にけり水の音

湯は谷川にとをからぬ道

またすてはつかしの身や

老にかくなによそほひの朝かゝみ

とかにしもゆへある人を云なして
しのかさねたるゑひのさかつき

そむきはてたる世こそやすけれ」

君になと下につかへてうれふらん

見るかうちより雨になりきぬ

老はつるうきになみたのますかゝみ

このはるかすみたちいてゝみよ

影ぞふる野守のかゝみ跡とめて

くるゝよしるきともし火の影

よひ聲もちかよる浪の海士小舟

きゝなるゝ嵐の音のいかはかり

年をへつゝも松にすむ露

心たゝ法のみちには入かねて

かたなつきなるまきのあらこま

跡よりも猶つたふ川ふね

朝またきよとのゝ車やりかねて

霞のうちのみちのかたゝゝ

あつまるも百のつかさのさまゝに

わか竹のかけは干尋になひきあひて」

きしのそこなる苔の青端

里をあまたにすめる家ゝゝ
孫子にやさかへのほとんしらるらん
そこといわたのをのゝかりふし

たとりつゝ山路とゆれば月落て

舟はむかひにさして行軸

夕しほにあさせしられぬ湊川

かれてものこる菊の一本

大沢や池のかたへのたまり水

かさぬる袖も余所にはつかし

かはらけにえひのみたれをあらはして

なかれてなひく水のうき草

かたしろやゆふしてそへて捨けらし

あつまの程やそてにおほゆる

焼物にひとりの灰をかきならし

よを思ひとるこゝろかしこし」

いはけなき程にも国やゆつるらん

おろかにてめくみなきよを恨めや

えらひにもるゝやまとことのは

ましはるもえにしならすや法の場

神のいかきのかたはらの寺

はしよりすゑにかへる柴人

かたわるゝ舟はあやうきふもと川

里のなもなくすむ人やたれ

心あるけしきもしるき新参

ちかひのこゝろたかはしの中

佛にやさらにわか身を任すらん
けちめもあらぬましはりもかな
袖はたゝあけもみとりもつらなりて

まつるてふ玉の行衛のいかならん
月にかたしく下かへのつま

たえぬ心そつゐにあたなる」

つらしとて出づる世にも立かへり

それくゝのむくひの程をとく法に

三にしたかふ身をいかへせむ

日は暮(マツル)のやとりしもなき

雨きはふ雲のけしきを三輪か崎

命まつまはあるにまかせよ

子をも猶よわひの後はあはれみて

かたかけわたすはしそ朽たる

楼もたゝかたはかりにや残るらん

たく火にちかきねやの戸の内

袖はたゝふせこのほかも匂ふ夜に

古さといはけなきをも隔来て

うさやおほるのすまゐ成らん

道まかひ行谷のかたそは

爰かしてふすゐや土をうかつらん

ひとりねに有し別を思ひ出て」

ふるきふすまをかつく朝床

あはれ日ななき比のさひしき

まなふへきひとつのこともしらぬ身に

人のへたては宇治山の陰

まつ夜半はたゝ橋姫のさむしろに

むすひよる袖は泉の玉霰

夢をしのたのりの下臥

馴てたに庵のうちはさひしきに

昨日けふかもよを出し人

心にこゝろしのはれんやは

よむ哥も思ひかへせはことたらて

なみたそ袖のかたみとはなる

かきりあれはうす黒衣ぬきすてゝ

しほはやからし沖津しら波

下をるゝ洲崎の芦へむらゝに

長閑なる夢に枕を敷あかて」

火桶や老の友となるらん

後の世かけてわふる身の程

こゝろをはいまはのきはもはふらさし

いつくにめくるはるの夜の月

かはらけもさけのむしろに重りて

かつくもかしくき人の衣の色

たちまふにしも心みえけり

かれたる末にのこる草むら

かりてはず谷の下柴打みたれ

はこひてかへるかせの山柴

見るか中に市の日くるゝわたし舟

法のをしへをおもふたひゝ

おさまるはうしろみからの君か代に

またうつしゑもそれとなき色

よをさりし人は忘れん物ならて

さすらへつゝもいつこかくれん」

なてしこの哀つけこそすことのはに

谷のかくれものとかなる比

捨る身も君かみかけをあふく代に

かりそめふしや衣ぬきをく

みやつかへ帰るすまゐに打とけて

かねにおき行春の明ほの

寺ちかき住家は法にうとからて

松風にもよほされぬる我涙

むかしを残すみさゝきの道

かすかにつゝく橋の一すぢ

山あひの雲や朝にわかるらん

百敷のすたれのすき間重なりて

みき給ふなりもろ人の袖

かたむるまとの戸さしあやなし

ちかひてや法の日数を定らん

心隔はましはりも何」

塵のよは佛も神としかかしな

なかははれたる風のうき霧

大井川入江の松の一むらに

おろかなる心に法はえかたしや

いかにをんなと生れいてけん

あるゝをまゝの庵さひたり

世を出はあすまでも身をたのまめや
かさねきる下より袖はくちぬらし

身のあつしきもやゝ程をへぬ

わたらんことをいそくよと舟

今日こそは祭ともきけ男山

思ふとち打とけつゝもくむなきけ

聲くはへてもうとふ一ふし

身にそへる心の鬼におとるかて

かはらの軒は月うつるかけ

哥にしもつらねにけりな心さし」

まつさかつきのけしきとりつゝ

しはしけふりをたてぬ山かけ

なき人を送りても猶名残あれや

もる人もなくあはれ神かき

紅葉せしみむろの木末ちりつくし

舟にたく火の数くのかけ

冬の夜もしらぬうら人釣たれて

川上よりの風のはけしき

龍のすむあたりもしるく雲おりて

よにあまされて身はかひもなし

あはれとも老をはたれかなくさめん

灯をともなふかけや常ならん

ならへてすめるあまの家く

霧ふりてよしのゝ宮の暮さひし

より音とをき水の江の波

身にあまる涙や袖の露ならし」
衣の色はゆるされてけり

舟こそよすれすみよしの濱

日のおつるむこのねおろし吹あれて

色くくの袖くちみゆる小車に

関むかへさへるいひろき人

鳩の海や波のうき果にうかひ出て

川口しるき水のしら淡

たもとすしくあせ過る道

急るをもさめてや後におほゆるん

なみならぬ身にうらみんもいさ

えにしさへおとりの腹はおとりきて

朝夕におもひの玉をくりかへし

又こそむすへ下かえのつま

あらましの世にさきたてる人はうし

しなはともにと云し友なひ

うらみすてぬは我そつれなき

うき世とはいひくならかゝつらひ

あまおとめおもかけとめぬ跡はおし

あはれおきなあはれのなげく身のはて

たしき心いかてまきれん

かきまけを定る哥のしなくに

色くくの花にかけそふ野邊の月

さらになみたもふるつかの前

糸すちみたす瀧つしら浪

つりさほもむなしくかへる河ふねに

くつれそひたるそはのかた

かきくゑやはたのさかひと成ぬらん

きこえもあへぬことのはのみち

磯ちかくうるまの嶋の舟よせて

さしのほる舟もはやせをこえかねて

ひきもたかしなみのゆふしほ

よはふこたへもなみの舟人

うつし絵にあはれ心のしたかひて

くみかさねたる酔のさかつき

たひ行をあまたの人や送るらん

とつる氷もほそき江の水

草かりの舟も朽たる綱手組

なきかすかたをうつし繪のまへ

玉たれのこすまきあくる雲のうへ

よる波たかきすまのうら風

あまを舟せとの塩瀬やおとすらん

いつよりかさて住すつるあと

もりぬへき世もかきり有陵に

むらとをきかたは往来も稀にして

となりもともにみたれたる國

あやしきは色めく人のすかたにて

いかにかさせる扇なるらん

なひけはなひく竹の下風

ふる雨のあしから山の嶺の雲

なみたやせきをすへし通路

こふるにもつゐにかへらぬみつせ川

色にみたるゝ野へのむら萩

かせふけはよせくる波の玉川に

尾上に近き高砂のうら

こく舟は波のひゞきの灘こえて

人きそふなりたか関迎

須戸のうらや波まはるかに舟よせて

里さへかすむ山のいたゞき

ゆふつゝのいるさは雲にちりつきて

をくれこし友のゆくてにいざなはれ

まねけはまねくよとの川舟

古さとをそれかとへは人もなし

かへるやいかにうらしまの波

なれてもすまの住居わひしも」

はこふにやなをしほたるゝあま衣

浪よりをちにうかふつりふね

しほかまのうらにはいつか来にけらし

すゝしきかたに引でゆく袖

山ふかみしけ木に駒をおりたちて

たちこめて里もや霧のへたつらん

川音とをき宇治の山かけ

なみたの衣うちそかさぬる

おもふそのあまたの跡におくれるて

かねのひゞきもたよりならずや

法のみちいむを齋の宮にして

めさめて後のすきさゞふき

たひふしはきつね啼野を枕にて

すみうるやさえかへるひを待けらし

かそふれはたゞとをき市の日

しはしたちよるたひの中宿」

方便に法の品をもしりそめて

筆をのこしてむかふ品く

色あひもきぬによりたるすり衣

ましろみあへす夜や明ぬらし

かへりてもたひのこゝろをならひにて

なき人をおもひ出るに教添て

ゆかりに似はとしく／＼にのみ

ふかきこゝろやなを音羽川

山しなの跡は草木の中にして

から衣ゆるすはあさき色にして

さすらへても立かへるほと

ひろき野中の跡はむら雨

四の緒はさすかたえせぬ宮古にて

なかき日もくらすなにはのうらつたひ

雨さそひくるむこの山風

岩のうへよりおつる瀧川」

水にすむ魚をせうひの心にて

もしほ火の煙やかせのまゝならん

まはらにあめる小屋のあしかき

宿直人おりにしたかふ月の夜に

ものゝけはひも冷しきころ

さすかゆへある古跡の道

折く荷前のつかひたえぬよに

よなくをなれての月の室の戸に

よるへをちきる秋の舟人

たすよりのほりかねたる位山

夜るひるつかへきにし年なみ

夢の間はさらに昔の人ならて

末かすゑにもうつる世中

古ことかたりしるはずくなし

笛の音のつたへうれしきねにたて

松のはの所くのかけを浅み

したりつもある山あひの水

朽てくつれもかたはらの塘

神さふるひわたの軒はかたふきて

くちたる舟はかたよりにけり

かり帰る草に馬やはうつもれて

しくれは窓の明方のおと

灯のまたき消るさよ風に

行人もなき道の一すち

しめなはにいもるの宿はしるかれや

さ夜更かたのあやなさかつき

門出こそ物うき旅のはしめなれ

ひかへぬる袖もかすめる関道に

舟ははるかに打いてのはま

友なひてひろふ薪の袖おほみ

たれもうきよとすて、入山

なかもあかしてくらす日なかし

かしこきは学ふる文の巻くくに

あつさにたえぬうた、ねの袖

おこたるも名残しはしのわらはやみ

ひかりのとかにたけのほるやま

明方としらする星に雲消て

よをすつる山のおくにもこと聞て

治るときにたちかへる人

雪はたつもあるか上に猶ちりて

真柴こりゆくかたはらの道

かく文のまた墨付もたとくし

あはれみふかきわらからの中

ふりぬるもさすかに里はすてかたみ

よこさまあめはいかにすかみの

山のあらしの吹おつるおと

みねの松ふもとにつくたか村に

例ならぬ思ひよ身をもはちらひて

むなしきからとなし、帰るさ

遠きゆかりも求めゆかはや

身はかくていつこの國にさすらへん

琴の音をきくにくるの猶添て

つしりつ、もうたふ飛鳥井

こほれしも又むすふ白露

秋をへて糸にはつる、藤衣

消跡よりきりまかふ空

はるくと横たつ山のみねの雲

蚊のこゑや残る暑にしけからん
にしにひかりのうつるしつかや

身はいつまでの老のなからへ

友はみななきかおほくもなれるよに

あわれかくはなれてをくるをのゝ奥

おひたる馬やかひすてにけん

忍ひしのふもあふまでとこそ

いにしへの跡を残せる君か代に

いづくにかむすひさためん草枕

となたかなたにたひのあらまし

とをきよし野をうつしをく山

天人の袖ふるあとをしたふよに

人音もたく火もきえて静まりぬ

まつりすきたる神のひろ前

へたて有けるさとの中河

芦根はふあたりは高きなかれすに

おこたりかちのまなひ也けり

ましなひのつたへをうくるはらわやみ

さすか名残をおもふ野の宮

かたふける井かきを中の草村に

風すさみぬる竹の下みち

あしからや嶺のつゝきのむら雲に

鶯のしめゆふ庭になれくと

神のみむろのあさけしつけし

わかゝたに今かへるさと人

百敷の外衛もりつゝあかず夜に

霜ふみかへるあま人のみち

雲のうへの舞のいりあや更る夜に

おとろふる身をとふこそはあはれなれ

たひにほとへて見ればみし人

入江の波につなぎをくふね

はるくとあみのうけなほくりよせて

しけきの^(マ)中の水おつるおと

しら波のあさ瀬を見する名取河

くるしきはまたなれやらぬ宮つかへ

いはけなくのみみわのはふりこ

あらましの身にすてぬ世中

うき身にも猶おしむこそ命なれ

おさまれる世は時をしる物なれや

民のうれへもなきくらつかさ

れいならざりし心地おこたる

くらま寺うしろの山にたち出て

あらたむるかきりの後の墨の袖

いつきの宮に住し身もうし

なげのなさはさすかななる中

佗人のとめる家ゐにたち入て

すゝしさやいつこもとめん里はなれ

日は入かたのすまのうら風

波のそこなる声のいくむら

日の本の國の始は世々を経ぬ

百敷やつらなる袖のいろくくに

あまたの馬を引わけてゆく

けさまでも夢も結はぬ草枕

たひはなれぬそこそかなしき

遙にもなきたる浪のこしの海」

しほのみちひのこやあひの風

その里人とみるもゆかしき

九重の出入しけき小車に

沢はふもとの水のたえく

此舟のおもきはさほもさしすてゝ

そむく心はいさめてもなに

乱れ行國のつかさはあやうきに

なたゝるはそれとしらるゝましはりに

えらひあつむる哥の品く

かり寝のまくら夢は絶けり

吹おつるあらしの聲もうつつの山

いく筋ならし道の末く

ひめをけるしらへはことに別きて

めくるしくれのすさまじき空

いろわかぬあらしの松のむらからす

こなたかなたに繩手ひく舟」

住吉の神にいのりし末とけて

いたるの水にさむき月影

櫛つむあかつき露に袖ぬれて

めぐりくる年のわたりの手向して

なみたま袖になをみつせ川

弘治二年九月十日

於坂本晴元(細川晴元)御興行

折のこすけふや誰為宿の菊

あくる露まにこ蝶とふ庭

虫のねも夜寒の月に猶添て

野はらの色も秋や更けむ

松の風払か上の露霜に

岩ね傳のまくらかる暮

むえきつる空に山路の末みえて

谷のかくれもうつる日のかけ

河音に出ても雪や残るらん

汀にうすきわか草の色

はなちかふ野は春駒のうちむれて

幾さと人のかへる夕陰

玉鉦の道も絶くをく密に

柳うちりり月になる空

風ふけハ秋の螢の影消て

明行雲もはつかりの聲

なかめやる海迎しつけき蟬小舟

越へきかたのとをきうらなみ

梅

晴元

言

留月

宗養

藤孝

紹巴

泰識

善三

不老

元信

長頼

元知

元加

仍景

梅

元

言

暮渡る峯よりおくにかねなりて

いらかさひしき杉のむら立

かすかなる苔路の末は散花に

しつく音する春雨の跡

曙の霞に羽吹鳥鳴て

その生に竹のかけふかき月

野をかけて秋行水のかたはらに

袖すさましく船よする暮

取はらふ真柴は霜の重りて

賤やさひしくあらし吹比

問はれぬを憂ならはしの楨^ノとに

あさはかになと契をくらん

此世さへたのみすくなき行衛にて

名残かなしきたひの別路

知しらすあひやとりしてあかすよに

雨しつかなる木かくれの山

みるくも落はにまじる雪を薄み

日もゆふかせになれるはけしき

下水のをとも氷にとちやらて

田つらの蛙はるもあさしや

里はたゞ道もかすますあらは也

しけみかき分出る野の末

露くらき月まつまの霄^ノ過て

いくたひうつる袖のいなつま

うたゝねハさめての後の秋風に

(7月9)

日

養

孝

巴

識

三

老

信

頼

元

梅

言

孝

養

知

巴

加

元

言

月

識

頼

老

巴

わすれむとすれは人の悲しさ

残をく形見もつらき思ひにて

別し今朝の面かけのくれ

夏かけてかすめは春の遠山に

はなな雲かと心うつるふ

昔より芳野のさくらめてゝきて

長閑にとのみすみなせる菴

たれか先うき世中を出つらん

うら見にたえぬ人のはかなさ

打向なみたはかりにこたへせて

かゝみをみるもこひ瘦しかけ

うつりかは袖のまとをに残きぬ

秋風さそふ露の萩はら

あひぬやとつま問鹿の帰る野に

空は夜ふかき月のさやけさ

あけは猶越も行へき嶺の空

ほとゝきすくるたそかれの声

一ふしにしふる笛の遠さかり

いさなはれこし契あたる

かたりつゝよその憂をも身にしらて

二道なからたのむはかなさ

をそくときたよりを花の山陰に

ひとりつくれば千こゑ百声

馬や路の末や数多にかすむらん

打出るかたは水みとり也

梅

信

養

孝

元

養

梅

元

巴

養

言

三

信

梅

月

識

言

巴

頼

元

梅

養

老

知

閑にもかもめのうかふ江は晴て
 まはらにあしの枯残るかけ
 神さひて三輪の松原はふる雪に
 あらしを寒みくるゝ灯
 かこふともみえぬ計の柴の葦
 すすてゝより身はさもあらはめれ
 逢にたに思かへたるわか命
 つれなさも猶いつまてのよそ
 松の色しくるゝ秋のとしゝに
 ふる宮ところ月もかはらぬ
 鈴虫の声もくるれば消渡
 山のかけ野はしのに風ふく
 冬かれは一本のこるむら薄
 つきてふるにも雪の道芝
 霜なからとるや薪の朝なく
 さそなやつれも侘人の袖
 身をしむる思ひのなみた度ゝに
 鳥かねかなしみしかよの月
 見ても猶あかぬものこそ心なれ
 春よ秋よと夢に覚けり
 かへらんはいつをまてとの須戸の浦
 舟によりきてあらし夕波
 山とをみいくへの雲のしくるらん
 都も今そさむくなり行
 立出るをのゝ炭うり声ゝに

梅 月 巴 孝 識 三 養 梅 言 元 三 巴 信 言 梅 養 三 識 孝 巴 月 梅

あくるあしたの袖のしたかせ
 はなの香を一夜ぬしより名残にて
 草にあかぬはるのやすらひ
 はるゝと霞の上に鳴ひはり
 入日なからに雨そゝくなり
 くれ竹の葉分に白き水落て
 岡へにつゝくさとのかけはし

ある人の追善に
 何色

かれゝに問も跡ある浅茅哉
 はらひもあへぬ庭の夕霜
 池になくをしの上毛の月寒み
 岩ねの水によるの山かせ
 あくるまで夢もむすはぬかり枕
 たえずみやこを思ひやる空
 重れる雲やみるゝ帰るらん
 秋のしくれの晴わたるくれ
 陰ふかき木のはに更る霜の色
 道はをしかの分残すやま

近衛殿(種家)
 梅 十二句 宗養 十一
 晴元 十 細川長節太輔
 聖門(奉院院道増准后) 藤孝 七
 言 十句 紹巴 十
 留月 七 奉公衆 泰識 六
 同 善三 細川衆
 同 不老 同 元知
 同 元加 同 元知
 聖門衆 長頼 仍景(昌叱) 一
 異村

月 梅 言 元 孝 巴 信

紹巴 良政 藤孝 昌叱 巴 政 孝 叱 前

心前(蘆中心前)

人けなき田中の菴も月澄て
遠方になる風の音信

涼しさはしはし計の衣手に
雨すこしつゝ立出るやと

なみたこそ旅にいむへき心なれ
ちきるかたみの哀あやしも

時のまも逢をかきりと慰めて
うちのたらへはにくからぬ人

まけてうき恨の筋も乱碁に
酔ふすまでも汲るさかつき

年毎の花を水無瀬の春にきて
霞なかるゝ山川の末

二
日のうつる方や氷の解ぬらん
竹のはたれのしもさやく音

とりくゝにやとりわかるゝ朝朗
衣をかさねゝたる旅人

幽なるきりまの月を掃見て
いる野を遠みすかる鳴こゑ

茹あとはいく一むらの真萩原
薄の上やたゝ秋のもり

夏の日の方の空にをくら山
うすき袂にきはふむら雨

撥音もこと更舞に引かへし
したふ心のほとは見えけり

よるは夢ひるはうかへる佛に

孝 巴 前 政 巴 前 叱 孝 政 巴 前 叱 孝 政 叱 前 巴 孝 政 巴 孝 叱 前 政 巴

物のけめきてものおもふ比

つゝめともたえぬうらみをいかゝせん
うき身ながらも猶たのむ中

生行蓮はむねに遠からて
かへさわするゝ此法の場

みせはやの雲のはやしの秋の暮
いろくゝになる岡のかたはら

むしのねのはのかなりつる声そひて
夜寒の露の更るまにくゝ

月も猶ふたりあらはのさ庭に
さしこそこもれつらき園の戸

おらせしと花に心や尽すらん
さくらか枝にうくひすそなく

散雪も霞の内の野は消て
たか袖をしも干振の山

三
おはしまに夕日かけさす峯の寺
立かへれとの鐘ひゝくなり

古のこゝろしらるゝ寤覚して
うき世中に住しくやしき

釣に身をなし終るこそ哀なれ
あともはるけき水の江の波

五月雨に堤の木草色朽て
駒飼捨る道のへのさと

さそはれし山や思はず暮ぬらん
あらしにとつる谷の戸の雲

前 政 孝 巴 叱 前 巴 孝 政 叱 前 巴 孝 政 叱 前 巴 孝 政 叱 前 政 巴

秋のよの雪は相まの月更て
扇をしはし置し手枕

名乗ぬを身にしめつゝやかこたまし

おほかなしやあさからぬ文

古事をのこすも宇治の宿問て

うつしかやれはみやこともいさ

うへそへて茂る木高き楨松原

もるや氷室の陰ふかき道

暮かゝる岩まつたひに水落て

たえくなれや川上の雲

いなつまに光まかひて飛軒

待ほとをそきこすの外の月

ちきり置露をあはれむ袖の上

それとはかりのあさかほのいろ

山姫の眉に柳のはなかつら

たかならはしに霞行空

秋来ると春てふはるに帰鴈

苗代小田の水ひろき末

舟つなく芦の丸屋は傾て

いり日の影も雨ちかきいろ

山松のひゝきをつゝむ白雲に

夏もさくらのはなや三吉野

もるとともに哀とおしる人もなし

こなたはさやる二道の末

あたなるを頼はたえんうき心

叱 巴 孝 政 巴 叱 前 孝 巴 政 孝 前 叱 巴 政 孝 前 叱 巴 政 孝 前

なれなはいかに思やまはや
別れこそ逢に定まる行術なれ

月よりの西のあか月の雲

淡路かた秋の千鳥の鳴立て

冷しくなる沖津塩かせ

こく舟のとまりもあへず暮る日に

けふりにこもる遠の松はら

跡もまたかはかぬ上にみそれして

たれか朝ふむ真砂ちの末

神垣や立寄袖のかすくくに

うたふを聞はずなを成こゑ

おさまれる代もたゝ君の心にて

水すなからかゝる隠家

こゝかしこ木毎のはなを深山路に

かすめるかたもしるへこそあれ

天正九年三月十六日

何人

霞つゝ有明に秋の夜はもかな

婦尸なく遠のしら雲

浦波もひとへに岑の花咲て

雨晴わたる末の松はら

吹たえぬあらしや雪をささふらん

すたれをまけは袖の寒けさ

竹のはにうつる朝日の影薄み

政 孝 巴 政 叱 前 孝 前 叱 巴 政 孝 前 叱 巴 政 孝 前 尊智 孝 叱 巴 政 前 巴 叱 文閑 宗及 等安

茹田の西の霧のむらゝ
 秋の霜むすぶ跡より清けらし
 羽をともしけき鳥のいろゝ
 舟下す岩ま傳ひの水上に
 涼しさをくる瀬々の夕かせ
 芦のはや波のまにゝ靡くらん
 笹やは塩のひまあらは也
 雲をも拂ふ計の雨そゝき
 はるけきのへを分て行袖
 またきより草の枕を起出て
 月に先たち駒いはふこゑ
 山本の市路は遠き霧の中
 なれ冷し三輪川の波
 凧や杉間の色をつくすらん
 いらかの軒の入り日さやけし
 二 半天にたゝよふ雲のかたよりて
 けふり出てはきゆる芥火
 蚊の声も更ぬれは猶しけからし
 あつさに絶ぬうたゝねの袖
 をこたるも名残しはしのわらはやみ
 ものゝけめける心ちあやしも
 おほえすも何のねたまの積るらん
 へたてそめつゝうとき兄弟
 憂は猶身のおとろへを思ひ侘
 ひとりなかむる浅茅生の月

則益 景韵 巴 孝 叱 前 閑 及 安 益 前 巴 孝 叱 韵 閑 及 安 益 前 巴 孝 叱 韵 閑

秋風に覚ての後の夜の夢
 枕にとをし衣うつをと
 たとりこし里はいつくの野への末
 たか垣内の梅にはふらん
 ニウ 雪はたゝ消ぬかうへに降添て
 いつかは出ん谷のうくひす
 あさかりし春の限の今日の暮
 みちなん年をいはふ言の葉
 まことならぬ親をもおやかにかしつきて
 あはれ御膳を写絵の前
 かしは手を打行ひや終るらん
 さひしかりけり古寺の門
 梯の霜踏分るあとたえて
 ふかき夕に帰る柴人
 をくれぬる友待つるゝ渡し舟
 月遅かれや春の川上
 一むらは柳に花に埋れて
 浅緑なる小田の苗代
 雨やたゝかすめる露に残るらん
 ね所まよひこてふ飛かふ
 草ゝも野分めきたる風立て
 かこふともなき古跡の秋
 しかすかに砌や声をしのふらん
 月ふくるまで入たてぬ人
 寄臥もつらき衣の下の帯

及 孝 巴 叱 益 前 孝 巴 前 叱 安 孝 巴 閑 韵 及 叱 巴 前 益 叱 巴 孝 及

いもゐのほとは床のかたはら
 さたまれる日かすみつまで神祭
 はなにしつめて見はや春風
 遠山も霞晴たる馬の上
 聞すへ鳥のあまた鳴聲
 草むらのみたれあひぬる末くくに
 色おしまるゝ今朝の初雪
 三ッ
 秋の螢の絶くのかけ
 水さひをや散て柳のなかつらん
 ふくにしたかふ風のうき草
 おろし置網の綱手も近き江に
 いくむらとなくさとつゝく道
 おさまるも司によれる國ならし
 文の学のさかしをろかさ
 さきのよのむくひの程を顕して
 つれなきとしりつれなくそこふ
 度くにとたゝく戸さしの答あれな
 すむ人いかに葎はふ宿
 無跡はうちつけにしも哀也
 かすめるかたをおもひやる暮
 鐘の音しつけき春の山のかけ
 桜かりにやかり枕せん
 永日もやゝおちかゝる空にして
 めくりめくれる酔の盃

前 益 及 閑 安 孝 叱 前 巴 益 閑 及 孝 巴 前 巴 益 韻 叱 安 孝 及 巴 前 韻

諸人にたまふ扇の折にふれて
 夏きにけりと立かふる袖
 雲にしも天の香久山顕れて
 夜のまに映る雪の曙
 関の戸の松に過行風の声
 月にちりそふ陰のみみちは
 澄わたる池の水かけひやゝかに
 つかはぬをしの霧に立をと
 ふうす鴨の翅の霜のいかはかり
 あたら田つらのうらかれの色
 假初の菴の軒のまはらにて
 ころる浅くも世を出る人
 花ちればたつにいたる芳野山
 かすみもさひし横たてるおく
 且解るたるひは岩にしたゝりて
 かけ樋の末の幽なるをと
 爰かしこ作りならふる家くに行
 行こそつとへ袖の色く

紹巴 十四 宗及(天王寺屋宗及か) 十一 藤孝 十四
 等安 八 昌叱 十三 則益 九 心前 十三
 景韻 七 文閑(四条道場) 十 金阿 一

天正十年正月五日
 何船

孝 叱 巴 安 韻 益 及 孝 前 閑 巴 及 孝 前 叱 閑 安 金阿

なひきそはん行衛みえけり春霞
柳風吹園のわか草

雨晴る垣ねの水の長閑にて
入日うつろふさとの遠かた

末はたゝ月に成へき道ならん
霧立こむる山あひの袖

鳴出る男鹿の声の遠からて
くれわたりたる小田のかたはら

川そひの堤に舟やつなくらん
里こそ見えね竹の一むら

ほのかなる烟の末の霜とけて
山のかくれも朝日さすかけ

ね所を立はなれたる鳥の聲
俄に風やはけしかりけむ

かりまぐら半絶行夜の夢
人の名残は有明の月

誰に憂かへさ問よる袖の露
言葉色めく中のあやしさ

あさはかの契なからにかゝり来て
幾春をくる此遠津国

咲比のはなの都を思やり
雲ちを鴈のわかれこそゆけ

雪やまた高ねつたひに残るらん
あらしにさむき柴人の袖
こきくたす舟はなかれのかたよりて

紹巴

藤孝

日中

昌叱

鳥中

左大弁

永孝

了任

浄勝

永種

正繁

宗及

百悦

友益

孝

巴

叱

日中

中

任

永

種

勝

及

岩のはさまの浪こゆるをと

白雨や川上よりも晴ぬらん

雲にもれたる日かけ涼しも

山深き木々の下荻そよめきて

秋も鹿子の音をたてぬ道

作るともあら田の面の露しけみ

草の菴の月のさひしき

更る夜は独の床の目もあはて

袖の氷はいつとけてまし

ものおもふこゝろや春もしらさらん

なかもあかしてくらす日永し

賢は学ふる文の巻々に

とくことはりのふかき法の師

善悪をおもひ分つに世を捨て

ましはる中のしたきともなひ

幾度も酔の歪くみかはし

いそく門出そ名残おほかる

明ぬまをしのふる人の小車に

難面きほとを月にうらみん

憂になと露の命のかゝるらん

よはりて虫の声の哀さ

風は猶垣ほの野へに立添て

くるゝまにへおろすこすの戸

日かすへてうつろふ後のはなの陰

春の水行岸の山ふき

繁

孝

巴

叱

日中

弁

中

任

永

巴

孝

種

勝

及

弁

中

叱

悦

巴

任

繁

日中

永孝

孝

しからむや霞のそこの波の音
 田中をとをみほりわかちつゝ
 梯はむらよりむらのさかひにて
 のほりはつればまた高き山
 谷あひの道には遅き夜半の月
 雲立まよふ秋風のくれ
 跡先のつはさためぬ天津厂
 帰るつはめの軒はさり行
 降やまぬ雨にも末の星みえて
 うふる早苗のみとりいくむら
 岡のへやまつの木のかたゝに
 太山嵐の過るたひゝ
 篠ふれは霞みたれて冴くらし
 枕はとるもいかてねなまし
 三ツ 心猶へたてをきたるさよ衣
 なへてつらきやおやならぬおや
 なからふる秋をならひの玉まつり
 うらかれまての色草の露
 真葛葉の風ももらさぬ笹にて
 残るあつさや松の戸の内
 曉になるまで月に打むかひ
 余所のわかれをまつかはかなさ
 愚なる夫のいなせきかまほし
 あたにはせしの一筆の跡
 形見そと留置たる草子にて

種 巴 中 叱 及 弁 日 勝 任 繁 孝 永 叱 悦 巴 中 勝 種 孝 叱 日 中 巴 繁 任 弁 日 中 及 叱 中 巴 種

むかしも今の心ちこそすれ
 かさずにやよはひかくるゝ花の枝
 袖のかすみもあかなくの友
 半天に行をしたひて飛こ蝶
 あかる雲雀の草むらの露
 春雨のそゝき捨たる夕附日
 かくれは出る奥のつり舟
 浦風も絶ゝ浪のしつまりて
 塩干になれる声へはるけし
 とりゝにおりるてあさる声す也
 狩残す野はひろき一かた
 見るかうちに降つもりぬる雪の暮
 若葉つたひにさくら散かけ
 まつほともなくさみなれやほとゝきす
 まくらそはたつ闇のあけほの
 月はや山のはつかにかたむきて
 霧のつゝめる鐘ひゝき来ぬ
 吹落る木末の秋の風寒み
 ありしをまゝの住るなりけり
 くれて猶うちそふ浪の濱底
 あやうきはたゝ岩のかけみち
 葛城やたか入そめしやまならん
 また明ぬよの空のしら雲
 下駄の月と花にあきもせて
 かへるさしらぬ春のかたらひ

種 叱 永 巴 弁 及 中 叱 任 孝 悦 勝 巴 永 叱 種 中 孝 及 繁 種 叱 任 巴 繁 種 日 中 永 巴 弁 及 中 叱 任 孝 悦 勝 巴 永 叱 種

紹巴 十一 永孝(高倉永孝)七 百悦 五
 藤孝 九 了任(仁木伊智入道)八 友益(速水友益)一
 日中納言(日野中納言輝資)七 淨勝 六
 昌叱 十 永種(松永永種)八
 鳥中納言(鳥丸中納言光宣)八 正繁(津田正繁)七
 左大弁 七 宗及 六

天正十三年五月廿七日

何船

道をたゞせは茂る草もなし
 分る野山の露の涼しさ
 白雨の雲はかたへの岑越て
 みるくすめる中天の月
 秋風や水上よりも送るらん
 下葉かつく柳ちるなり
 玉銚の袖ひやくかに暮初て
 幾重はかりの霧なひからむ(マツ)
 一方は過行あともむらしくれ
 日影さやけき遠の山の端
 人帰る麓の里に鐘鳴て
 舟ほのかにもけふる江の水
 陰深き舟よりおくも明放れ
 栖につく道のすゑく
 捨はつる身をさへ友の尋来て
 かたるまはたうきもわするゝ

紹巴 白 玄以 秋 昌叱 心前 文閑 英枯 正繁 玄何 巴 以 白 旨 秋

かそふるにえさらぬさはり恨かぬ
 雲のたゞよふ夜なくの月
 野分めくあらしは絶ぬ音にして
 梢の色もまはらなるかけ
 かたへより落もて行や花の雪
 瀧の水も解そむるころ
 打返す布留のう田面遙にて
 雨けもよほすあけほのう空
 一聲の後もまたるゝほどゝきす
 引閉なんはさひし草の戸
 問帰る跡をしはしはしたひ出て
 夢の現のちきりかなしも
 重ねてもむなしき人のから衣
 わすれんものか袖のうつり香
 俤はくれしも残る菊の秋
 山路の月にかりまくらせり
 さをしかのこゑを夜舟に聞明し
 風すさまじき高砂の波
 杉たてる木の間の桜色消て
 夕のおくの鐘のすむをと
 古寺やしつけき春の雨の中
 心もふかき墨染のそて
 背出る世は人遣の道ならて
 年へて住もいかに蓬生
 冬枯ぬ陰の松虫声乍し

紹巴 白 玄以 秋 昌叱 心前 文閑 英枯 正繁 玄何 巴 以 白 旨 秋

今朝より霜の箇のへの暮
 拾ひつゝ薪は菴に遠からて
 もしほくむにや日はうつるらむ
 さしのほる影良寒き秋の月
 うちそひけらし麻のさ衣(マ)
 馬や猶鞭にまかする霧蔵
 春も深谷の雪のかけはし
 はなに又風や嵐の小倉山
 若葉も野への薄みたるゝ
 またきより朝鷹人の立出て
 霞に袖やいさなはれけむ
 うかひ行舟遙なる池の波
 蓬かしまをおもひやる宿
 傳も猶なかき恨と成けらし
 淺きえにしはかけはなれてよ
 たのむるもうはへ計の情にて
 より所なき田舎わたらん
 月に露はらふも深き草枕
 秋こそ旅のうき限なれ
 古郷の事かたらなん天津厂
 知人あらぬなにはつの春
 梅かゝも色もや枝にこもるらん
 年は越てもひかり寒けし
 降つくや曇の内の雪の岑
 霜の掣の竹の葉つたひ

叱 白 旨 繁 以 前 巴 叱 以 前 旨 閑 叱 巴 白 秋 枯 閑 旨 前 繁 以 白 叱 巴

ね所を明てもさらぬ鳥啼て
 扉にちかき庭の遺水
 松風や残る暑きをさそふらん
 袂にかゝるむら雨の露
 四の緒のしらへもあはれ月の暮
 誰をか人の待ならふらん
 いはけなき程は契もおほつか歌。な
 つるのよすかはいかにはてゝ
 親も先このかみをこそ思ふらめ
 うけきて絶す吹家の風
 山／＼のはなを下樋の水に見て
 莓踏分る道そかすめる
 世を去し佛を吊に泪落
 あやしきはたゝ向ふうつし絵
 恨たるあふきと置もやらさらん
 あひやとりする秋の蚊の声
 夕やみの月待倦る軒の面
 陰高かれやしけき桐の葉
 たゝみあくる石をそのまゝ井けたにて
 古き砌をかこひてそすむ
 時めくはうつす都に行ましり
 春日の神の誓たえせぬ
 類しもあらてそ深き法の道
 心の筋をみたさんもやは
 しのひつゝあふよなからの朝ねかみ

秋 旨 繁 前 白 閑 以 枯 巴 秋 前 叱 閑 巴 秋 白 叱 以 前 繁 旨

枕の下はたゞまくらのみ

命はた今はのきはと告遣て

おもひかはすもゆかり也けり

後れしもならへて結ふ柴の厩

里はなれなる陰の山畑

見る人もなき葦原の花はおし

夕くれふかき款冬の色

静にもかかずめる露に蝶のねて

めくるかきりも夏の日永さ

紹巴 十二 心前 十一 玄以(前田玄以) 十

文閑 八 白(聖護院道澄准后) 十一句

英枯(石井英枯) 八 玄旨 十一 正繁 七

秋(大覺寺義俊大僧正) 九句 玄何 一 昌叱 十二

天正十五三月晦日

於聖護院殿

おしむなよ心に匂ひ花の春

夕のかねのかすむ遠山

長閑なる波の行衛に舟留て

かたふくまでの月の友なひ

虫の音にをろさてふかす玉簾

野分の跡の砌しつけし

朝霧の霽に雨や残るらむ

袖ほのかなる木かくれの道

白 秋 枯 前 巴 以 旨 白 叱

紹巴 白 玄以 鳥中 昌叱 日中 心前 玄旨

あかすしも涼しき方に休らひて

引とめてそ駒に水かふ

柴人や山より出てかへるらむ

雪けの雲のくれかゝる空

俄にも吹立風の音はして

関越やつす旅の衣手

へたてこし都いかにと思像

あはれを尽す文の言の葉

つもりぬる恨の程をつゝみかね

相見るにまつ泪さしくむ

つかふるもうれしきはたゞ親心

世にためしなきよはひ也けり

月に今物いひかはす計にて

秋風かなしかたしきの夢

かり衣打かさねつゝ明しかね

空にさえぬる時雨いくたひ

村の紅葉の陰は散尽し

さひしくたてる松の木高さ

問よるも唯となる覽は道絶て

あたなる人そしたふかひなき

別ては又たか方にうつるらん

鴈啼て行はるのあけほの

峯の雲うすき霞にあらはれて

杉まわつかにさくらさくいろ

波やたゞせかれて遠きはつせ河

文閑 時慶朝臣 雅継朝臣 友益 宗句 玄何 白 巴 鳥 以 日 叱 旨 前 閑 慶 前 旨 叱 日 以 鳥 巴 白 玄何 前 旨 叱 白 以 勻 巴 繼 益 閑 慶 前 旨 叱 日 以 鳥 巴 白 玄何

風もあらしにふきかほることゑ
 夕まくれ月をよそしと戸さしよて
 ぬるよ袂やむらさめの露
 分出る道の萩はら陰深み
 いつちうつらをかり立しあと
 廣きのよさかひしられす日は落て
 またきよりしも草まくらせり
 旅に行あらまし遠く思ふよに
 一すちにのみ佛となふる
 尋ぬなよ心まきるよしはの庵
 つよかぬまよの道のかけはし
 初雪はふるかうちよりかつとけて
 ところよの竹の葉の露
 さ夜風に猶消のほる秋の月
 身にしめて待人のつれなさ
 見せはやの花の色香も夕にて
 落なんもおし宿の梅かえ
 うくひすの羽ふき出たる軒近み
 霧もや谷の春をふかむる
 雨雲のそよくとせしは立消て
 田つらのなかれ音かすかななり
 くつれそふ池の堤の爰かしこ
 枯たる草の根さしみしかき
 人つたふまつりの場の跡さひし
 かけはあらはにくるよともし火

鳥 日 巴 閑 以 白 益 旨 前 日 叱 鳥 繼 前 巴 以 勻 慶 旨 益 白 以 閑 巴 日 鳥

月またてあやしやこもる闇の内
 あはぬ人さへ露よなみたよ
 ぬれ衣をきするも君か秋にして
 袖やよ寒し落る瀧ち
 洞はたよ入へき道も浅からず
 ふするの床もあれまさる跡
 賤は猶田中に庵をつくりかへ
 垣はつよきにかよる瓜つる
 五月雨の晴れば竹のみとりにて
 岸にあらたる川なみの音
 みるよも釣の小舟は漕婦り
 身はいつまでかさすらへぬへき
 九重の月はさそなと向ひるて
 難波のさとの秋のあはれさ
 雲霧のはるよともなき伊駒山
 おもひのはてよいかにしてまし
 玉のをもたえは絶ねの中にして
 出ていなんもなれし淺茅生
 住かふる人は花よりはなのもと
 とめ行道の末そかすめる
 聞すへし鳥やぬすたつ聲ならん
 夜は明くれの雪の山きえ
 空寒きあらしも鐘も絶はてよ
 まとろむほともさむしろの月
 とふ人にむかしかたりの秋もなし

叱 慶 旨 前 白 繼 巴 叱 益 旨 繼 以 前 白 鳥 閑 日 巴 以 勻 旨 前 叱 益 閑 日 鳥

なきをかそへて玉まつりする

石も唯吾むすまゝにかた計

くみすてけりないさら井の水

一夏のすくるもはやき室の戸に

しほれし衣あらためてきる

泪こそしのふにあまるものならぬ

かへり見するもうきは身のほと

時めくにましはりをさへたてられ

引こもりぬる宇治の山かけ

雨しふくあしろの床の夕風に

白浪こゆるむれ木のすゑ

かたふける柳に花の散そひて

永日うつるまりの数く

から衣はるの盃とりかはし

見るにもあかぬ舞のいりあや

かさしつるかほりも残る菊の枝

山路の露やわけかへるらむ

紹巴 十 玄旨 九 白 九句

玄以 九 時慶 (西洞院時慶) 九

雅継 (飛鳥井雅庸) 六 昌叱 九

日中 七 宗勻 (松田梅軒) 六

玄何 一

文閑 七

鳥中 七

友益 六

心前 九

白 巴 以 鳥 日 勻 叱 慶 巴 旨 閑 鳥 前 繼 以 日

玉何

治れる世の声しるし百千鳥

竹の葉分の日影長閑き

窓の梅今朝ひらけたる色そひて

ちりくる軒の雪はらふ袖

吹出るあらしや雲をさそふらん

やゝほのかなる月のとをやま

小男鹿の鳴かた近く暮初て

砌の野辺の露そみたるゝ

草高き霧の籬やへたつらむ

分こそまよへかへるさの道

指よする舟待程の休らひに

涼しさならず竹の下水

夕立の雨や霰に残るらむ

こえつくしたる嶺のしら雪

天乙女琴笛の音をしらへそへ

うたふ夜更る灯のかけ

かたはらに酔の眼を先立て

ともなふ人も月の手まくら

しるしらす相宿りする秋の野に

朝市いそぐ道の露けさ

山かつもはなの木陰にたゝすみて

袖をはふるゝつゝし山ふき

はるもはや暮て行衛をしたひ侘

またこんとしも老はたのます

玄旨 松 昌叱 白 秋 紹巴 得 前 成 以 守

ナのそみこそ人によるへき心なれ
 わひかねつるもなくほとゝきす
 明やすき神なひやまの月出て
 茂りはくらきもりのした陰
 雨や猶水のひゝきにはれさらむ
 またこきかへるあまのつり舟
 ならへ住芦やのほとり暮初て
 ナ稲葉そよめく小田の末く
 みるくも秋のけしきやかはるらむ
 空も今はたやゝさむきころ
 さやかなる月の光は雪に似て
 ツはつ卯花の咲つゝく陰
 行かへる里のかきほの爰かして
 やせたる馬やはなちかふらむ
 ハ山畑のさかひもさすか跡有て
 若葉にまじる萩のやけはら
 かつくも野辺のさわらひ萌けらし
 そゝきすてたる春雨の空
 鴈かねや月を翅にわかるらむ
 古郷いそく旅の行すゑ
 暮るより夢もみるやの草枕
 いつこかきかぬ松風のやま
 柴のとさしはたれをまたまし
 うかれめの捨はてられし宿りにて
 いつはりのみをいひやつくさん

己松旨白叱巴松盛德前秋巴叱白松盛德前秋巴叱白松盛德前秋巴叱
 己松旨白叱巴松盛德前秋巴叱白松盛德前秋巴叱

三
 さまくにとくも興有法の道
 くむもなかれの末のたえく
 指いるもみるより塩の遠干溝
 出すとせしもつなく江の舟
 高東風に成行雲のはやからん
 時をしれとかなひく青柳
 鶯も春たつ口より啼初て
 ひまあらはなる雪の谷の戸
 岩ふむもさかしき道は遠かれや
 ひろひつゝして爪木求る
 侘にたる里やおち穂を頼らん
 それかとはかりあつまれる袖
 ハ虫はたゝ露をたよりに鳴出て
 野分ののちの月のさやけさ
 ツかならずもとふへき折と立うかれ
 コふみのつかひのかへしうれしも
 程ふれはすみやつかむの遠つ國
 しる人まれのかたらひはなに
 哀又ましはるもうき新枕
 あさき色しもことほりの袖
 手折にも冬木の梅はわつかにて
 やふしかくれそ猶はかさなる
 入日さす軒やねくらの村すゝめ
 住あらしたる古寺のうち
 塵や猶はらはぬまゝにつもるらん

叱守己以松秋白盛前巴松德以己守叱
 叱守己以松秋白盛前巴松德以己守叱

うとむをいかにゆかりともせむ
 おもはずもをか世になる身の向後
 かはらすとのみちきりつる中
 花ゆへになれそめぬるもえにしあれや
 するもしらぬもかすみ汲袖
 もしほやく村より春のよは明て
 やゝのとかにもなれる濱かせ
 からさきやこほりとけての浪の音
 みしもあとなきゆきの山もと
 柴のとの道は紅葉の色朽て
 さひしかれとやむしも鳴らん
 ひとりたゝかたしく月の草まくら
 あるもしらぬやとは露けき
 としふれはあまたむなしくこと問て
 心よ花やなみたもろなる
 いつはりをたのみしも只幾そ度
 難面きともしたふはかなさ
 ものこしやかちかねつゝ別きて
 聲はやりかにいひし一こと
 山かつのをしへし道は行まよひ
 問をいとひてかふるかくれ家
 めてぬれは花も浮世と思ひ促
 かすめる月にそむきてそぬる
 永日の暮るもしらぬゑひ心ち
 はるさへなみもあら磯のふね

徳善 日大 新 光 何 旨 敏 益 俊 巴 應 白 叱 徳善 日大 新三 光 旨 旨 敏 巴 俊 白

岩にしも生るみるめを求かね
 住ぬすてたる芦のやのうち
 あらしさへきかぬみやこにかへりきぬ
 みしふしのねやちかき大ひえ
 重れる雲を明れははれわたり
 時雨つくせる遠のなかぞら
 さたかなる日影は松にかくろひて
 まくすかはらやまつ秋の色
 さをしかの鳴ねはとをき夕ま暮
 咲とたえたるきりのしたかせ
 月やたゝかはせの浪にしつむらん
 しかまのうらのをちの朝なき
 ゆふはらへなかれてかゝる名残あれや
 しはしこかけのあめの中やと
 駒かひてをくれしほとやいそくらん
 こゆへきかたの山のさかしさ
 柴人のちかきあたりはこりつつくし
 かこふすみかもかすそひにけり
 うつすこそ昨日今日かのみやこなれ
 うへてもまつやさくらさく比
 とりのねもかすむ砌のこす局て
 春の御前のひろきいけ水
 糸竹のしらへたへなる舟の内
 哥にやふかきこゝろみすらん
 名のみたゝ頼む使にあらはして

旨 徳善 應 叱 旨 仍 俊 敏 叱 新三 光 仍 應 徳善 日大 新三 光 旨 俊 白 日大

あひ初る夜のけはひあやしも

いかてかく人たかへては契るらん

ことよきにたゝはかられてうき

夫となきたより尋て田舎住

こしちくやくしく立かへるやま

はつかなるみねものこらぬ峯おろし

霧にはなるゝ月のさやけさ

更行は水涼しきあまをふね

しるへもなみにしほそみちくる

住の江や岸ねの松も花遊

雨そゝきにやおもき藤か枝

東風咲は廊のめぐりのかたふきて

春たにわひし古寺の内

鐘のをとにくるゝ弥生の空はおし

まくらもさらにとらぬあか月

時鳥夢もうつゝもつてまちて

御階をちかみにほふたち花

幾世をかふるよもきふの宮ところ

あはれゆきゝもたえゝのみち

佗ぬれは伴ひぬるもへたゝりて

新嶋守と成終にけり

寝もたゝ報そと身やかへるらん

思ふとは猶おもふへきのみ

さりともと月は有明の影にして

霧にくるゝさよかせの末

仍 敏 巴 旨 叱 新三 光 應 德善 巴 益 仍 敏 白 俊 叱 新三 益 日大 德善 旨 光 巴 應 白

槇のはの中にもれたる色さひし

仙山かけの花の一もと

去年しつる枝折す道とめて

野や分なれしはるのたひ人

聞は只塚はるけきあかためし

治りきての國のつきゝ

百しきやあまたなりけり蔵司

頼みのほともたえぬなりはひ

紹巴法眼 八 義光 七 應其上人 七 景政 六

白 八 友益 七 唱叱 九

長俊(山中長俊)七 德善院(前田玄以)八

玄仲(里村玄仲)一 日大 八 新三位(毛利輝元)七

玄旨法印 九 玄仍

七月十九日藤孝公来臨和漢会地蔵院

秋風を庭の教の一葉かな

梧涼無暑残

乍晴弓様月

入山ちかしくるゝ日の影

江の浪も深々見えし湊舟

源氏抄(中院通勝の岷江入楚)出来之時(慶長三年)

氷てもなかれ底なき入江かな

元日

はるも去年立は今年の霞哉

日大

德善

益

叱

俊

仍

旨

玄仲

景政

九

八

七

一

藤孝

藤孝

三甫

三甫

藤孝

藤孝

藤孝

藤孝

藤孝

藤孝

元日年等之立春なれば
とし越ていさよふ春の霞哉

試筆

今日は先あすの春立霞かな

田辺にて

やみならぬ雪もあやなし梅の花

如水より発句所望につるて則菊の池中津にあれば

秋の露やつもりて菊の池の水

六月十七日為 勅使日野重相(日野輝資) 御下向之

時田辺木瓢菴にての御興行

涼しさや月もふけ井の浦の浪

しける柳の森の下かせ

はなちりし岡への里のはる暮て

池をみきりにかこひなす宿

法のため汲あかつきに起馴て

旅衣行くへの道遠み

おくるかきりや淀の川舟

すみえぬほとはちやし(マて)まきく

いとみつゝ合すへき糸の大和哥

さしとめてしはしやすらふ舟の上

立舞袖もかへすいと竹

たひ立人の末ははるけし

唐土の使のえらひ定りて

住吉に明石の舟やよりぬらん

俄にあらきむこの袖おろし

みるかうちより雲そかさなる

遠近の花にこすまく紅なく

長閑にも移る日影を広み

澤水白きにしの一すち

よそになりぬる鴛鴨の声

隼や雲のいつこにかけるらん

朝戸ひらくにはるとしもなし

梅かえもまたさきやらぬ神の庭

契つゝあかぬことはの色はなし

恋しなはきみ藤ころもきよ

おもかけはかさしの花にますかゝみ

たつの都のはるの夜の月

羽吹出たる谷のうくひす

さゝのはのみ山の朝氣霜さきて

むすふも久し一度のほと

水無月をむろのかきりの氷にて

そはたてる岩の滴や深からん

むらもみちする蕙のはかつら

袖はたゝ霞につゝく門の前

関むかひにもいさむはるこま

田邊二橋の堤普請被仰付候時柳を

植侍るへきよし御誕也其時之御発句

めもはるに築や堤のさし柳

松下民部少輔(松下述久) 一折可有興行之由

ありて発句所望なれば

松風やぬれぬ時雨の下紅葉

薩州御下向之時

西へ行月はくまなき木の間に哉

同時珠長興行

菰に聲浪と風とやいその松

ひかたにかゝる秋の村雨珠長

雲霧のまにまつのかけりきて淨光明寺

大隅正八幡社領勤落之時則なげきの森によせて

木枯をなげきの森の落は哉

京一条のやしきにて

水ならて木のはなかるゝ岩ま哉

いかにわするゝやとの草の葉

日をへつゝやするをまゝの馬やちに

波にさそはれうかふうき草

ひろ沢の池のをしかもはふき出

慶長六年十一月廿三日於八条殿(智仁親王)

朝霜のしろきを後の落葉哉

月にあらしのをときへし庭

名残かなしきはるのまひ姫

くはゝれるやよひの三日のことふきに

色(智仁親王)「

色

旨」

付句抜句

涼しきは風なきとても木かけ哉

三谷のひむろもりすてし道

みきりに今朝の霜やをくらん

くれ竹の葉分をしなみうつる日に

一かたは霧にもれたる小田の原

松すさましくたてる杉むら

河はふもとの水のたえゝ

柴舟のおもきは棹もさし捨て

いつくともきくにわかれぬ鐘の音

ねふるもはかなとくのりの場

ゆるされやらすなをつかへ人

一きはのくらゐをのそむ袖の色

夕暮の月につまことしらへそへ

ほしのひかりをうつすともし火

かすみきえ行をはつせの山」

河浪の水をいつるはるかせに

鳴かはす蛙の声はあまたにて

夏はまれにもなれるうくひす

うへをくもかきほの竹のかけあさみ

やかてこほるゝ朝かほの露

月にさめぬるかりふしの夢

しのふれはそらおほれして待夜はに

一枝もおらせしともるはなのかけ

雪のふる木の梅のあはれさ

あらしのをとにとつる柴の戸

二たひは世にかへらしと身を捨て

そむくこゝろはいさめてもなき

みたれ行國のつかきはあやうきに
秋はなをやつれし袖も散わひて
なみた露けきよな〜の月

軒はにちかくそよく荻のは」
またあらし小鷹鳥かひ帰る野に

旅にわかつて、やとりの名残あれや
遠さかるまで舟まねくそて

おもふかきりはのこる言の葉
中嫌のけしきをたにもとりわひて

名たゝるはそれとしらるゝましはりに
えらひあつむる哥のしな〜

かくらの場の月そ更行
人こそる里のちまたの辻やしろ

とふに猶はたうらのまさしき
つるにかくつれなきはうきならひにて

あたなるにたのみかけての物思ひ
鳥はたちてもちる花のすゝ

よとのわたりのかすむ行すゑ
舟出こそ送りし人のかきりなれ

にけなきを忍ふ契の世にもれて」
すきこゝろこそおもひのくせなれ

とふにあはれのふかきふるあと
いさら井の水をくみよる住居して

花さしすゝく御仏のまん(マヘカ)
もりの木すへに月そ色そふ

春日野や秋に入日の影きえて

かれつゝたてる薄一むら

きくもたゝその名残そとむつましみ

わかれて後もには鳥のなく

かりねのまくら夢はたえけり

吹おいる嵐の声もうつの山

霞にそゝく雨のつれ〜

とふ人は思ひもかけぬ草の庵

松にたるかけ樋の水の末かれて

かけの山田そつくり捨たる

たれをまつとは虫のなく聲」

消は身もつるにいつくの野への露

いく年をかたつ田舎に送らまし

やしなはれても子はあはれなり

池のつら(つら)にはふくをしかも

岩かねの松のはしゝに雪ふりて

慶長四年三月四日松下民部少輔興行

花の香を相追にちきれ松の風

柳さくらの立ならふかけ

九重の門は霞に明そめて

くつれ行きしねつたひを波こへて

雨にあれたるさとのかきほ田

しのふる中のえにしはかなき

その人のゆかりときくになくさめて

兼如(猪苗代兼如)

述久

玄旨

下もえもこや野のゆくてはつかにて
かつはおりたくむらの市柴

雨の名残のやり水のをと」

打はらふかけひの末のちりあくた
度く／＼に梅のにほひを袖にふれ

いとむこ／＼も春のたき物

うきは戸ほそを出るおもかけ

物の化もいのるしにあらはれて

紅葉はかさなるまの秋風に

夕の霜を松むしの聲

あつまりてなくいくむらすゝめ

やふれたる車もさすかやとし置

月こそはかりねの床のよすかなれ
袖をは人に見せはやの露

咲もすみれやしほれはてまし

すき返す岩田の小野の日数へて

おこたりしまつりや更におこす覽

ふたゝひ玉のこかれぬるくれ」

思ひ出て佛のわかれなくなみた

いつきのみやに住つけるほと

旅たつ人をいはひこそすれ

なくなるをやかて神ともあふけたゝ

暮行まゝにともし火のかけ

はるかなるあまの家嶋霧晴て

天正元六月廿四日（綿考に廿六日・福井氏六日）何人
百韻」於勝龍寺兩吟

花の時風をやまたん夕すゝみ

しける木の間の月うすき庭

雨かすむ垣ほの梅の山かけて

通す田面の末はるかなり

跡さきに立別行鷹の聲

身は旅にしもいつまでの空

かりそめの宿りに雪の降そひて

狩はのをのゝ日こそくれけれ

萩薄おらぬ袖なきかへるさに

虫の鳴音そまれになりたる

秋の風更行霜やかさぬ覽

きぬたまきすて又はねぬめり

月もやゝ入かたちかき草の戸に

あはれいつこの山ほとゝきす

五月雨はよとのも浪に舟とめて

所く／＼のまこもかるあと

なかれにや村のさかひを分つらん

田中につく道の一すち

はなれ駒いはふ馬にし引つれて

たのむともなくともに打ふす

いはけなきつかひや何といひなさん

しのふかきりはあふまてとこそ

さかしくとかつはしるく遠さかり

不審藤孝敏 玄旨

紹巴

同

玄旨

同

紹巴

同

都の外はたよりのなきのみ

わたつみをかさしの花におもひやり

霞のうちやあはちしま山

よこ雲に春のあらしの吹絶て

つらやまくらの夢のうきはし

床の上のうたかたやみのなみた川

夜よ尽よと物思ふころ

通路は程ふるかほをあらはさて

袖くちいくへこすの小車

まつりにとさそひ出たる人おほみ

なをわか國とまほる氏神

唐土のむなしきつかの跡とひて

つるきもおもふためにおしまぬ

百敷やきさみくまふのほり

ねたましきこそ前わたりなれ

しのひぬるあたり人のたゝすみて

花にはあらし浅茅生の道

梅か香も有明方の野への露

羽吹もいかにうくひすのこゑ

けふはまた霞もやらす春たち

ひかしの空に雲かゝる山

暮てより梶を絶たる沖津舟

けしきも風の遠近の浪

秋に今下葉ちりそふ柳原

よもきか露もふりにたるかと

紹巴

同

玄旨

同

紹巴

月こそはかはらぬまゝの友ならめ

なれくてもも纏のもろ声

九月五日奈良にて宿の亭主所望にて

山風に鹿の音もろし下紅葉

九月十三夜

影はたゝみてる計の月夜哉

山何

春待て咲や一木の梅の花

松は冬ともしら雪の庭

日影にや手飼の纏のはふくらん

かすみに月は有明の空

浦傳ひ出る夜舟の長閑にて

去年のあらしは遠山の陰

打渡す谷の棧たえくりに

岩ねくの道かすか也

夕露になひき合たる村薄

ところくの萩かえの色

立ならず鹿の音いつちかへるらん

月は入野の風のしつけき

そことなく結ひきたむる草枕

旅の行衛の道のかたはら

やすむまにをくれし友と待つて

渡す小舟もおもき山柴

玄旨

紹巴

同

玄旨

同

同

同

同

松

白

玄旨

秋

紹巴

玄以

頼隆

全宗

友盛

昌叱

心前

由己

友益

松

白

玄旨

雨にしも河辺は浪のこす計
 たよひつゝもかゝるうき草
 散そひし柳の本の花のいろ
 かすみに暮る入あひの聲
 打むれてかへきの春の野を遠み
 山はいつくの鳥のさへつり
 霜白き竹の林や明ぬらん
 月影さむき里の遠近
 秋はたゝ砧のをとに夢覺て
 それかとはかり鳴わたる空
 雲霧や海つら遠くへたつ覽
 出しそいつの九重のうち
 明果るとのゑまうしの聲はして
 うつりもて行時の程なき
 咲つゝく砌は廣き花盛
 千里の末も打霞む比
 なかれおきかへす田面は野をかけて
 氷とくれはまさる沢水
 はなち置駒やつれつゝいはふらん
 賀茂のまつりの折にあひぬる
 面影はみずもあらぬを思ひ侘
 夢の行衛の契りはかなき
 衣くの後もまくらによりふして
 人まとはせる有明の月
 玉ほこの道もわかれぬ霧のうち

秋 紹巴 玄以 頼隆 全宗 友盛 昌叱 心前 白 松 白 由己 秋 玄旨 玄以 紹巴 全宗 頼隆 昌叱 友益 松 心前 由己 昌叱 玄旨 白

いつれまきにとえらふ虫の昔
 もみちはに松はむら／＼ましはりて
 奥ふかくしもしのき入山
 世をうしと思ひとりてや捨けらし
 まれになりたる人のをとつれ
 塵は猶つもる恨の夜半の床
 いつしかにたゝふかさるゝ中
 忍ふるも文は度／＼ひらきみて
 かゝみを爰に泻しゑのかけ
 三 朝朗月かたふける淡路かた
 時雨ゆくかの波の秋風
 あしかきの隙も露の漸寒み
 しほれかちにもさける朝只
 松虫の程しもあらずよはり果
 たえむとさかりおもふ玉のを
 逢事の限りも涙落添て
 をくりいてゝの旅の盃
 かへりみて猶古里やしたふらし
 むすふもあやなかりふしの夢
 をこたらず學ふとするもおろかにて
 いさめをきくもいはけなき程
 心にもまかせぬこそはえにしなれ
 おなしどころに又やむまれん
 三 年ことの巢をし忘れず飛燕
 小家さひしき春雨の比

紹巴 松 秋 玄以 友盛 全宗 頼隆 玄旨 白 心前 由己 松 紹巴 心前 由己 松 紹巴 心前 由己 全宗 松 昌叱 由己 白 全宗 玄旨 玄以 友益 玄旨 白

雪きえの跡をなよ竹おれかゝり
おちそふはなを打はらふ袖

あかたなの雫もたえすくみ馴て
法の心のあかつきのこゑ

山ふかきかたにも月やすみぬらん
うら枯わたるむさしのゝ露
たか歌 蒼の爰にかしこにそよめきて

すゑはいつくのかり人の暮

問よらん宿りの程の道遠み

うかれいてゝのよそめはつかし

かならずと契らぬ夜半もたえかねて

たゝくに門のこたへつれなき

ゆかしきは匂ひ計のみすのうち

いつちすくらし小車のをと

河風の霧をよとのに吹こして

鳥羽田かつゝ色になる比

よひのまの月の光やうすからん

いな妻かよふうたゝねの袖

たのめつる扉はさらにさしやらて

手をとりかはし引入るつま

うる琴のすちをかしこく調へそへ

行すゑいかにならん笛の音

紅の色のうつるふ梅もおし

春さへまよふそのゝ朝霜

きさらきの仏の別哀にて

玄旨

松

昌叱

友盛

頼隆

心前

紹巴

全宗

秋

由己

玄以

昌叱

松

頼隆

玄旨

秋

全宗

紹巴

白

松

昌叱

こなたかなたにかすむ古寺
明ほのゝみねはいつこの鐘の音
名 ゆふつけとりも聞ぬよの雪

早舟はあらしはけしき波まくら
夕くれふかしせとのたか汐

中空に日はさしなからくもりきて
窓におほへる軒の松かけ

花にみし隣の梢茂り合

あらためつゝもすみか奥ある

松 十一 頼隆朝臣 七 白

友盛 七 玄旨 九 昌叱

秋 八 心前 八 紹巴

由己 七 玄以 八 友益

全宗(施薬院) 七 一

昌叱へ紹巴古今傳受有_ニ於昌叱興行(文祿三年二月廿一日)

古ことをさらに残さぬ春日哉

人の心やわかつ花く

秋草もうつし垣ねに萌出て

はれまみせたる雨の閑けさ

江を遠みうかふ小舟の朝朗

浪にうつれる月かすかなり

とふ螢霧のまかひの影にして

をく露しろき竹のはの末

釣簾巻は絶くになる風の音

白

心前

昌叱

松

玄旨

紹巴

秋

白

玄以

昌叱

紹巴

白

玄旨

日大

英枯

玄仍

景敏

友益

外山の鐘やくれ渡るらん
 人かへる道はふもとのかた／＼に
 をくれし袖も待つれぬめり
 忍ふよのしるへなくてはいかならん
 つれなき戸さしゆるすかたはら
 もり来つる櫻の枝も花散て
 やとりかへたるその／＼うくひす
 かた分て霞のうちや暮けらし
 きえまふりつゝ雪の山もとさい
 春ながら尾上下風はさえ／＼て
 末とをき野はかり残す袖
 一夜たゝ月にやしかん草薙
 むかしとひこし露の浅茅生
 暮ぬれは虫の音滋き砌にて
 すゝむなれたる秋そ身にしむ
 瀧浪や落て雨かとそゝくらん
 岑につゝける水上の雲
 みる／＼も松に日影のかたつひて
 鐘をしるへのふる寺の道
 あらましに過しつる世も住はなれ
 かたみのうらみつもる果／＼
 けさまでもそむき／＼の枕して
 身にふれころも夏はくるしき
 くす玉の糸や袂にみたるらん
 なかき根なから行あやめ草

既在 小和 巴 叱 白 旨 大 怙 仍 敏 益 在 叱 巴 旨 大 怙 仍 敏 大 怙 白 旨 巴 叱 巴 旨

かさなれる軒は月のほのかにて
 山は外面の目くらしの聲
 晴残る霧の半のひやゝかに
 木の下道の露はらひ行
 荒にしもたえてそすめる文所せい
 めくみなきとてつかへさらめや
 ふたりとは頼ぬ君か世を知て
 何人つまにかこちかけてん
 笛の音も琴のしらへに忍より
 衣の香ほりやもるゝ柴の戸
 手折きて色もこかめの花盛
 さりし佛やしたふをこなひ
 たれも今霞の衣立そへて
 分入かたはふかくさの谷
 月にしもふす猪の床やかへけらし
 秋の水こす岩のはさま田
三
 紅葉々に小河の流うつもれて
 人はあらしの渡る柴橋
 夕霜の白き庵の道淋し
 つねにひかりのうとき山あひ
 夏はたゝ涼しき方を求まし
 ところさためぬ夜半のかり臥
 化するは契りあまたの頼あひのれや
 ひらきひらかぬ袖の玉章
 度／＼の道のつたへの奥深み

敏 白 怙 大 在 仍 叱 旨 巴 益 白 敏 旨 巴 益 白 敏 仍 巴 仍 叱 益 仍 巴 白 大 怙 敏 旨 叱

風にはひ来る花の山ふみ

しかのうらや霞汀に船よせて

月に一つらかりかへるそら

隙をなみ夜田かる賤や出ぬらん

かたへはきゆる糶の初霜

籾ふきの内迄露のむすほ、れ

おりたく松の煙すくなき

しほれての化しきさそな麻衣

おもふにわかれますみになす袖

一筋に來ん世の逢せちかひ置

せきはとちめし吾なみた河

いにしへをね覚の床に忍はれて

老ての後は隠家もうき

友なふに情あるこそ都なれ

あはするからに哥のよしあし

春糶を四町の内にうつし入

水行月の夕あけほの

遠近に沢辺の鳴の聲そへて

ふしみの小田のほのかなる比

影も漸さしのほりたる朝日山

けふりにしるし夜半の薄雪

かたよりてそよめきけりな窓の竹

垣ほにたえぬさゝかにの糸

住捨る跡は残るもかた計

松はかたふく池の中嶋

巴 在 益 旨 大 仍 叱 枯 敏 白 叱 仍 旨 敏 巴 益 旨 大 在 枯 叱 仍 大 旨 益 在 巴

風や猶花のしからみかけぬらん

霞のひまに船よする音

えならぬや難波の春の夕詠

遠き伊駒の嶺の月影

秋寒み時雨くし空晴て

つれつゝわたる色鳥の聲

葉かくれの林のこのみしけるらし

あたりの野辺の小松生そふ

うつつしても程ふる神の宮るにて

繪のまきくのゆへをしらめや

もろこしの文をやよむにかたからん

祈りかけたる小初瀬の山

その人の俯みつる夢覺て

かりまくらさへ名残かほなる

月にはた重ね侘たるさよ衣

秋のにしきはなをあかぬ者

紹巴 十二 英 枯 九 昌 叱 十二 玄 仍 十

白 十 景 敏 (里村昌琢) 九 玄 旨 十二

友 益 九 日 大 九 既 在 七 小 和 二

天正七年正月十六日定家卿色帟藤孝所持之弘之會於

紹巴宿所興行之(異本と合校し朱にて訂正す。訂正

に從ふ、続類從四八一所収)

船何(続類從本「何人」)

白 大 枯 敏 叱 益 旨 巴 仍 叱 旨 益 在 大 仍

もしは草かく跡たえぬ霞哉

眞砂ち遠き春の夕浪

とけ渡る汀も氷る月出て

かへし捨たるを山田の末

霜枯の葛葉にかはる秋の風

かけはいつこの松生のこゑ

分て入袖も漸はた寒きのに

道の行衛もまよふ朝霧

いく度かかりねの宿のさよ時雨

あかぬ紅葉も敷つくす山

さひしさはとほれし友の立帰り

たか方にしもなくほとゝきす

なくなれば跡はあまたに尋きて

道のつたへをおこす末く

先たつやあかつき近き草枕

したふもあはれ夢の面影

かたみそとむかへは月も逢夜にて

をかん扇やいつまで袖

秋かけて蚊の細声の暮もうし

戸さしのうちに引こもりつゝ

花おつる木陰はみしの恨にて

野へのすみれそつむとしもなき

行方は鶯の音にいきなはれ

かすみになをもくらき明ほの

こち咲や雨を殘せる山ならむ

昌叱

藤孝

紹巴

心前

孝

叱

前

巴

孝

叱

前

孝

叱

巴

孝

叱

前

巴

孝

叱

前

巴

叱

入江のむらにかへるつり船

はるかなるすゝきかくるふ塩瀧て

松の木すゑも波や越けむ

むれつゝもねくらの鶯の打羽吹

あせをめぐりや深田なるらし

五月雨は里より里の道絶て

跡もわかれす高き草く

たき物にあらそふ名やは薄烟

すみかのさかひちかき山賤

かこふ野もをしか入立月更て

かり残したるさはのかたはら

霧ふりてまたきに空や暮けらし

行袖遠し峯のかけはし

杉村に寺のいらかの重なりて

明はつるかの鐘の声く

別路のうきをなくさむ独臥

しはしか程はのこるまくらか

ぬるゝをも心の花の露ふれて

袖にかさしの藤はいくふさ

諸人の春に出入春日山

絶ぬ祈やなを天か下

ひろこれる水の堤をつき兼て

根さえはひえぬ松のこしけさ

岩たゝみよちのほりてや月はみん

玉のみきりも露のふる跡

孝

前

孝

叱

前

巴

孝

叱

前

巴

孝

叱

前

巴

孝

叱

前

巴

孝

叱

前

巴

孝

昌叱 二十五 藤孝 同 紹巴 同 心前 同

増何(一に「何増」)(意不通の個所をイによって訂。
訂に従ふ)

雪晴て治まる四方の嵐かな
雲にはうとくさゆるよの月
天飛も汀に鴈のつらなりて
いり江の田面ほのかなる比
村芦や露置あへすそよくらん
夕日涼しく雨過るみち
行くもやとりは遠き旅の空
乗駒なつむ山のさかしき
梯は重なる末の岩つたひ
里のかたへや野につくくらし
呉竹の生そふ草の爰かしこ
たえくこゆる河岸の波
所くのこる堤の道みえて
朝氣の霜は小田の片原
鹿の音も遠さかり行山の陰
やゝしまれる秋風の月
立まよふ夕の霧も晴通り
野は遠近のうすくこき色
袖ことに花や手折てかへらん
あかぬ名残は九重の春
大ひえや明離行雲霞

玄以 法印 松 秋 紹巴 白 昌叱 友盛 法印 心前 朝臣 玄以 全宗 盛 玄以 松 白 巴 秋 旨 盛 叱 白 巴 秋 旨

風のさそふ鐘の間近さ
漕よする浦半の浪の舟の上
たく火のかけの蟹の一村
芦壻の奥ある道や暮かゝり
おほつかなくも忍ひぬるかた
恋すてふことも涙を始めにて
親にしたかふ程のあはれさ
賢もいはけなきにやみえざらん
あときたまらぬ筆のかきさま
あたによむ哥は度く改て
しらへかはせる糸竹の声
衣の香や釣簾の隙よりもれぬらん
月にしたふそ人の言の葉
思ひには吹くる風も身にしてみて
こゝろの霧はいつか拂はん
ニクイ 明暮の詠めに遠きふしの雪
のこりおほしや旅の帰るさ
限ある関のほかまで送り出
みるく舟は浪のをち方
作なす砌の池は海に似て
ふりてもさすか汐かまの跡
陰たかき松の梢の深みとり
野は草くのうらかれの比
鳴よるかまぐらに近き虫の聲
露霜さむく秋のさよ風

心 隆 巴 宗 松 以 巴 盛 叱 白 旨 秋 心 松 隆 叱 宗 巴 松 旨 前 以 巴 盛

ハマア以下同じ

柴の戸にかたふく月や更つらん
 出てもおもふうき世なりけり
 春はたゝ花に心をかけそめて
 さくらに鈴の音をたえせぬ
三十一
 鷹人の霞を分て入山に
 鳴たつ鳥いつち過くらん
 雨のよは更るもしらぬ戸ほそにて
 のこるもほそし燈のかけ
 秋もやゝ末に成行月の本
 きりゝすかとほのかなる聲
 冷しく夕霜さやく浅ちふに
 むらゝのこるもみちはの色
 大井河いせきの浪の立歸り
 くだす筏の袖の跡先
 方ゝに本ノマ□はし作る宮柱
 ちかひし神もえやはいつはる
 忘れしよ忘るはうき人心
 家にひとしき友のあらなん
三十二
 流人の道こそ絶れ山の奥
 科をも赦す御代の久しさ
 ほとゝを思ひわけての縣石
 花の宮古の住居うらやむ
 家ゝの門は柳に立ならへ
 春は物見の馬よ車よ
 今日や猶南祭のたえさらん

隆 白 松 旨 秋 隆 宗 巴 以 叱 巴 松 旨 前 白 盛 巴 巴 隆 宗 巴 前 叱

往来もおほしよとの河橋
 水白き方より明る霧の内
 布さらしをく道のへの月
 秋やたゝなにゝもわさのしけからん
 機をゝるなる虫もこそあれ
 吹まゝに草の袂の風寒み
 かりねのまくら暮て悲しき
名
 かへさをも忘るゝ酔の盃に
 いく度ひらく扇なりけん
 分て行夏野の原の道の末
 ねらひかりして明る短夜
 陰こそは木深き山のしけみなれ
 雲にやつゝむ瀧波のこゑ
 水はたゝきえぬる上にこるらん
 朝なゝやつみあらふ里
 苗代のはとりにつゝ道有て
 誰とはなしの袖のましはり
 さそはぬも行ゑは同じ市場の
 月もわきての住吉の秋
 うす霧にさす舟いつこまよふらん
名
 はや初塩のあらきうらかせ
 磯山の松の葛葉の色付て
 入日かくれや時雨ふるらし
 みるかうちにかはりもて行空の雲
 とりあへすしも帰る柴人

松 秋 旨 盛 以 隆 前 由 松 叱 巴 秋 以 白 盛 由 旨 前 隆 以

暮やすしすその鐘の音そひて
竹より奥やいくななるらん
鶯のやとりをしむる花の道
年ふる春の末の永日

天正十五年十一月廿八日

二月十四日伏見宅梅を籠に入たる座敷にて當座

香も水もるるや梅の花かたみ
かすめる野へを分かへる袖

朝またき出しかりはも暮そめて

かけふかき草はの露のこほれそひ

霧間の山のあきのむらさめ

さとはいつくのきぬたなるらん

うなはらや見渡し遠き浦浪に

ととめをきしをかこつ別路

とりかはす扇はかりをかた見にて

ましはりにたる舞の入あや

きくまゝに虫の音とをし月の暮

露より霜とうつり行あと

蓬生に昔の春のはなさきて

やとりはなれず鳥の鳴聲

なき人の跡をしとへはあはれにて

ねやの戸はその雨あしき音

松風や月の行衛に更ぬらん

叱 巴 秋 松

」

玄旨

玄

三省

高砂の浪すきましきとまり舟

うつりにけりなせとのしほ時

こすまで袖におしむ初雪

狩衣御幸の車とをき野に

岩ほつたひの水むせふをと

なかき夜もつかひはなれぬ鶯鳴て

一むらのすきや風になひくらん

かり田のはらのあせのほそ道

春にたえたるしかのうらかせ

おろしをく舟のはなはの永き日に

なみのまに／＼あみそかたよる

あもなるやその石川のせをはやみ

雨はたしはしはかりの空にして」

おとろくほとなる神の音

いさなひし人はいつくに成ぬらん

ふみたかへけりしのひ行道

いにしへの跡は浅茅の所得て

山住の人やおりけん花の枝

真柴つみをく春のかきうち

田つらの末そゆき絶たる

いそのかみ布留の高橋朽けらし

夢ちをさへにたのむさむしろ

かつはおりたく村の市柴

雨の名残のやり水の音

うちはらふかけひの末のちりあくた

度へに梅の匂ひを袖にふれ

いとむこゝろも春のたき物

うきは戸ほそをいつる面影

物の気も祈るしにあらはれて

紅葉はかさなるまゝの秋風に

ゆふへの霜をまつ虫の聲

あつまりてなくいく村雀

やふれたる車もさすかやとし置

月こそはかりねの床のよすかなれ

袖をは人にみせはやの露

さくもすみれやしほれはてまし

すきかへす岩田の小野の日数へて

をこたりしまつりやさらにをこすらん

ふたゝひ玉のうかれぬる暮

思ひ出て佛の別なくなみた

いつきの宮に住つけるほと

旅たつ人をいはひこそすれ

ふせきもやらず風のあらかき

忍恋

とほゝとへ忍の岡のしのすゝきはに出ぬまの露はいかにと

いつかさてくゆりわふともしらすへき身には忍ふの浦のもし

ほ火

萩露

いく度か袖ぬらしけん萩の花おらは落ぬへき露とみなから

時雨つる雲井の鴈のつはさよりこほれて結ふ萩の上の露

山旅

旅衣日もかさなりてやとへはおなし山路のみねのしら雲

峯をこえ谷にくたりてやとへはおなししるへと松風そ吹

晦日於也足軒興行に當座

夏 遊浦

うきみるを道の行手にひろひてや遊の浦の日を暮すらん

浦嶋

浪の音もひゝきをそへて住の江やうら嶋遠き松風そ吹

年なみのいくかへりとか浦嶋におい木の杉のまつそ久しき

七月五日 佐方吉右衛門尉(之昌) 興行

萩の葉に秋かせゆつる扇哉

月も軒はにかゝる夕露

簾まく外面に虫の鳴いてゝ

鳴すてし程はいつくの郭公

夏と秋との行かひのそら

里とをくしもやとりとひ行

へたてをく身をうち橋の絶やらて

とまふきのかけにや人のかへらん

又あつさそふくもり日の色

かたのゝ末の月になる比

行水もよとの河せの霧晴て

とひくやとかためもやらぬ松の戸に

ことよき口をたのむ中たち

たかきにまじる敷嶋のみち

此ころは煙をたゝぬ富士の山

光廣(烏丸光廣)

玄旨

之昌

なかめにのころ雪のむら／＼

立かくす霞のひまの北の峯

かけ初て絶さらんこそ契なれ」

祈きにける神のしめ縄

月に目さますこのとまり舟

秋にたに名残かなしき一夜妻

したふなる法のおこなひ絶やらて

つくこそおやの家の風なれ

へたては又まれの友なひ

かそふれは年をあまたの花咲て

住すつる軒をあらせる春の風

雨のあとをもみする糞虫

村鳥の朝日に出る聲はして

汀の氷くたく浦浪

かこつるかきのひまあらは也

瓜つるの末もたはにむすほ、れ

あすはちらんのはなの木の本

雨げにやさく山梨の露を、もみ

七夕に七遊し侍し時當座

けふ待てとわたる舟のかひもなくあふ瀬をたとる天の河浪

九月七日三井寺御再興有て柱立なと有とて照

高院殿有渡御御逗留為御見舞参上して(衆妙)

集に慶長四年九月八日として所収)

絶にける三井のなかれをあらためてさらにくみしる法の水哉

御かへし

かすかなる三井の流をとふ人に心の水をすましつる哉

十一月十八日初雪ふりける曉

ふりそめてまかへはまかふ影ながら有明の月に残る雪哉

靈山山莊にて若州少将殿(木下長嘯子)和歌會

興行とて題を送られ侍しに

橋上初雪

吹をくる雪のしからみかけそめて夕かせしろき谷の柴橋

眺望山雪

山のはの星の光もうす雲のたえ／＼みする暮の色哉

雪中迷曉

さすか又はらひはすてし終にわかあつめぬ窓の雪とみるにも

秀頼(豊臣秀頼)御祈禱とて北野万句に 花

花さけはならふ色なき草木哉有別不出之

よの常の花にはあらぬ色香哉

住吉の社に参て古今相傳子細有て

讀て奉納しける(綿考に元龜三年十二月初)

敷嶋のみちのつたへの末すくに行末まもれ住吉の神

也足軒久当國に居住有しを可被召出

候由勅定有之從勅修寺大納言殿被申

送て上洛時(慶長四年十月)

わするなよつはさつらねし友鶴のひとり雲井に立かへるとも

返事

かへるへき雲井にたとる友鶴のものとの澤へをたちははなれし

慶長四三十八大関一周忌懷舊連歌山中山城守(山中長俊)

於伏見宅興行

〽墨染のをしへ忘るなさくら花

野へを分こし袖の春雨

夕かすみまぐらの露に散そへて

こもりゐる窓をひらけは夏ふかみ

それかのこゑもしけくなる暮

まかきのかすみ立きえぬめり

打けふる春の朝けの里つゝき

くむにしもあかぬこそ猶なさけなれ

友さそひゆく山の井の水

軒のすたれそおろすまゝなる

〽袖くちも猶奥ふかき小車に

こゑたつるをしかや妻にまとふらん

吹いてにけるあらしはけしも

暮ぬれはそこしもなく鐘なりて

うちより浦にかへるつりふね

分いりにけるかけの浅茅生

〽みかきしく玉の臺もむかしにて」

こえん行衛をとふすゝか路

〽紅葉ちるあしのしのやにしはしねて

学ふるも心ときにはをくれきて

かり入まとうとりのおち草

静なる曉月におきなれて

かさねて霧のぬらすきぬゝ

戸さしもやらぬ相坂の関

〽おさまれる御國ゆつりの時過て

慶長四年 同五年在奥 玄旨

右以自筆之本書写校合了

長俊

文閑

天正二年六月廿三日

賦花何連歌

涼しさもつかふこゝろのいつみ哉

夕たちのこす庭の松かせ

雲まよふ山を軒はの月待て

はつかりかねのほのかなる空

旅の袖おもひやらるゝ秋さむみ

露よりしもにうつりゆく暮

色ゝの草の末葉もかれはてゝ

あさき野澤のなかれはるけし

山きはのかたへはのこる入日影

あらしにつるゝかねさやかなり

夢やたゝむすひもあへすさぬらん

こともかはさぬ夜はのかへるさ

さしこもる門はたゝくにおくふかみ

すむ人さへもうとき古寺

一度のほとはをくりし山のかけ

あつきののこりいかにたへまし

秋の日のやゝかたふける半天に

霧まはいつら月をそき影
時雨をや吹たつ風のさそふらん

藤孝

昌叱

雅敦朝臣

紹巴

心前

宗及

英枯

兼閑

了玄

重種

藤孝

昌叱

雅敦朝臣

紹巴

心前

宗及

英枯

兼閑

了玄

重種

藤孝

昌叱

雅敦朝臣

紹巴

心前

河音もなをそふる夕浪

散いつる花の匂ひやはつせ山

かすみをわくる杉のした道

をこたらぬ春の宮ゐの朝きよめ

まつりの日かす近くなりゆく

たれかまつはつこゑきかむ郭公

草のいほりの雨のさひしき

となりさへたちへたてたる夕煙

葉かくれうすき月のくれ竹

あさかほのうつろひのこる花はおし

露わすれすとよみをくる哥

けふまてのかたみの衣身にそへて

なきあとにしもめくる一とせ

あらを田の中にくちたる水車

さとやはしよりおくにあるらん

雲かゝるやまのあはひはかすかにて

かりねおきゆく野辺のはるけさ

鶯のやとりにちかきさままくら

えたも戸さしのうちの梅かゝ

あたりまで立こめけりな春かすみ

けふりにくるゝしほかまの浦

つりふねのかへれば風も吹たえて

はれのこりたるむらさめの山

ひくらしの鳴ねや月をいそくらん

すたきてあはれ夜氣やまつ虫

兼閑

了玄

昌叱

藤孝

紹巴

雅敦朝臣

心前

玄哉

英怙

宗及

藤孝

昌叱

了玄

紹巴

兼閑

心前

雅敦朝臣

英怙

紹巴

了玄

昌叱

藤孝

玄哉

心前

宗及

秋ふかくなればかけさへあさちふに

霜もまたひぬころもうつ音

暮てよりたく火やきえてさむからし

ふせきかねたる風のさゝふき

都人ゆるさぬ花の木のもとに

しるてなさけをくみかはす春

いちの日の永きをまゝに立さらて

わたすほとまつ河きしの船

まくらゆふ淀野、道の上をふかみ

かへりみすれば月も露けし

手おりくるあともなこりの小萩原

ゆふへはひとりしか鳴声

ふるさとの秋猶つらき山すみに

よつの嶺やたへつゝもふる

かよひ路もまれになりぬる雪の中

水こほる江にさはく鳴鳥

おれふすもかせのまに／＼みたれあし

田つらの庵の軒そかたふく

五月雨は露もしつても落そひて

みとりの色のふかきむら竹

かきこむるほとりはいつのさし柳

うつしかへたる九重の卷

あたらしきこよみのまきをとり／＼に

ちいろもしるきくろかみのすゑ

わたつうみや浪をかつきのあまをとめ

雅敦朝臣

藤孝

兼閑

心前

紹巴

昌叱

藤孝

紹巴

心前

玄哉

宗及

兼閑

昌叱

英怙

雅敦朝臣

藤孝

紹巴

了玄

英怙

紹巴

藤孝

心前

紹巴

昌叱

英怙

あかすもみつのうらのふね
 入かけはすしき秋の夕月夜
 ねやのすきまにおきの葉の露
 むしの声近よるまゝに目はさめて
 あはれいのちのかきりいつまで
 むくひをもこのよのほとにつくさはや
 すてはてはたゝ身を山のおく
 法をしもさきちる花のうつみ見て
 よそほひしめす春の御ほとけ
 雪は猶きゆる跡よりかきあつめ
 ほのけふらするかけの松の葉
 水とをくなかれいてたる岩つたひ
 おち瀧つせの末のしら淡
 風のまた茂りの花をあらはして
 そとものあふちさきつゝく色
 さしそふるひかりも雨のはれわたり
 秋のほたるのつれてゆく空
 なかき夜もはし居なからに明そめて
 こぬ人まては袖の月かけ
 ちきりこそあふきこそうきたのみなれ
 よはひふりてもなにかあためく
 うらみをもむかしかたりにうちませて
 世にあふ中におとろへてけり
 たれもたゝさためなきこそ身のゆくゑ
 かちをたえてのあら海の舟

雅敦朝臣
 了玄
 紹巴
 心前
 兼閑
 昌叱
 宗及
 藤孝
 玄哉
 紹巴
 心前
 兼閑
 藤孝
 昌叱
 了玄
 宗及
 英怙
 雅敦朝臣
 藤孝
 紹巴
 昌叱
 心前
 宗及
 英怙
 了玄

とふかりも嵐のいつちわかるらむ
 春の夜もやゝあかつきの雲
 長閑なる夢にまくらを敷あかて
 火をけや老の友となるらむ
 たれこめて風をもいとふ衣手に
 つくりかさねてなをふかき宿
 藤孝 十三 英怙 九 昌叱 十二
 兼閑 七 雅敦朝臣(飛鳥井雅敦) 九
 了玄 八 紹巴 十四 重種 二
 玄哉(辻玄哉) 七 心前 十一
 宗及 八

雅敦朝臣
 紹巴
 昌叱
 藤孝
 玄哉
 重種